

2016 年度

上半期報告書



夏合宿 劔御前小舎

信州大学山岳会

目次

《新人合宿》・・・3

《夏合宿》・・・11

《上級生雪訓》・・・23

《個人山行》

4月・・・24

・北八ヶ岳縦走

5月・・・25

GW 山行

・北ア 黒部源流部・神岡新道～湯俣

・北ア 黒部源流部・ブナ立尾根～神岡新

道

6月・・・28

・北ア 明神岳主稜

・北ア 劔岳北方稜線

・北ア 蝶ヶ岳～常念岳

・北ア 表銀座

7月・・・31

・北ア 樽海新道

・北ア 小倉谷・打込谷

・北ア 槍ヶ岳北鎌尾根

・北ア 白馬岳～唐松岳

・北ア 劔岳登攀

・中ア 中御所谷西横川

・中ア 中御所谷本谷

・南ア 北岳バットレス

・木曾 岩倉谷本谷・柿其川本谷

・八ヶ岳 大同心・小同心

・谷川連峰 大源太川北沢本谷

8月・・・40

・アルプス夏縦走

・アルプス夏縦走

・北ア 前穂北尾根(サマテン)

・北ア 滝谷登攀(サマテン)

・北ア 屏風岩雲稜ルート(サマテン)

・北ア 前穂東壁(サマテン)

・北ア 明神主稜(サマテン)

9月・・・48

・北ア 錫杖岳前衛フェース

・北ア 湯俣川・黒部源流

・北ア 奥穂高岳・西穂高岳

・北ア 前穂北尾根

・南ア 甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳

・南ア 赤石沢

・谷川連峰 万太郎谷本谷

・谷川連峰 ナルミズ沢

《事故報告書》・・・54

・奥穂高岳天狗沢落石事故

《新人合宿》

メンバー

会 4) 塩谷(CL) 蒲澤(SL) 会 3) 植野 大
槻 城田 山下 渡部 会 2) 小山 前田
村上 藪内 山口 会 1) 安坂 江川 佐
藤優 佐藤大祐 高井 田口

行程

5月23日：松本＝島々谷～岩魚留小屋～徳
本峠小屋(T.S.)

24日：T.S.～徳沢～横尾(B.C.)

25日：涸沢にて雪上訓練を行う

26日：同上

27日：同上

28日：槍ヶ岳アタック

29日：B.C.～徳沢～上高地＝松本

記録

5月23日

6：20～6：30 島々谷出発 11：00～11：40
岩魚留小屋 12：45～1：00 南沢 15：10～
15：40 徳本峠小屋

19人と人数が多いため、この日は2隊に分
かれて行動した。今年の一学生年の荷物は30
kg程度であった。一学生年の荷物が軽いこ
ともあり、去年よりも早く徳本峠小屋に到
着した。

5月24日

＜本隊＞5：30 起床 6：40 出発 9：00 明神
分岐 11：10 横尾山荘

＜奥又白偵察隊＞5：30 起床 10：00 新村橋
13：00 奥又白池 15：00 新村橋 16：00 横
尾山荘

徳本峠から横尾山荘までの移動日。徳本峠
からの下りでは落石への注意喚起を徹底し
た。

5月25日

＜本隊＞3：00 起床 4：10 出発 5：10 本谷

橋 8：30～12：00 涸沢にて雪上訓練 1：50

本谷橋 2：40 横尾山荘

＜北穂高東稜隊＞3：00 起床 4：15 出発 7：30

涸沢小屋 9：10 稜上の取付-10：30 同取付で
天候回復を待つも下降を判断～11：20 涸沢
ヒュッテ

セクン初日。恒例の涸沢バシリも初日。
ヘトヘトになりつつ、真剣にセクンに取り
組んだ。この日は基本的なキックステッ
プを反復練習した。

5月26日

＜本隊＞3：00 起床 4：15 出発 5：10 本谷
橋 7：30～12：30 涸沢にて雪上訓練 1：50
本谷橋 2：40 横尾山荘

＜北穂高東稜隊＞3：00 起床 4：00 出発 4：
50 本谷橋 7：30 南稜分岐 10：30 山頂 12：
50 本体と合流

セクン二日目。この日はキックステップ
に加えピッケルストップの訓練を行った。

5月27日 4：00 起床 5：10 出発 6：00 本
谷橋 8：10～11：00 涸沢にて雪上訓練 12：
20 本谷橋 1：10 横尾山荘

セクン最終日。この日の涸沢へのアプロ
ーチの際、上の斜面から落石が落ちてくる
という事があった。事なきを得たが、一年
生は落石の恐ろしさを実感したことと思う。
セクンは今までの総復習を行った。

5月28日

＜先登/後登＞2：30 起床 3：30/3：35 出発
4：20 一ノ俣 5：30 赤沢岩小屋 9：40 槍ヶ
岳山頂 11：05/11：15 槍ヶ岳山荘 14：
50/15：00 横尾山荘

槍アタック。今年は雪渓が少なく、本格的
に出てくるのは大曲の辺りからであった。
歌ったり叫んだりして元気を絞り出して登

った。今年は穂先に雪はなく、F I Xを行うことはなかった。

5月29日

3:30起床 5:30出発 6:30新村橋 10:00河童橋

下山日。恒例のマカポテを食べて、お墓参りをしてから下山した。

個人の反省

会4

CL 塩谷晃司

CLの役割とは何だろうか。そんなことを、合宿ではよく考えた。バシバシ指示を飛ばして隊をコントロールするのもリーダーだが、今回はその必要はないと感じた。それは2,3年生が主体的にやるだけの力があると思ったからである。むしろその方が、彼らのためになる。そんな思いで、私はある意味一步引いた立場で臨んだ。

全体的に見て、二年生はよくやった。去年も同じことを思った記憶があるが、立場が人を作るという言葉があるように上級生らしくはなった。それでも、まだまだ二年生。判断は未熟だ。自分の実力を過信せず、経験を積んでいってもらいたい。

三年生は自分たちのスタンスについて困惑する反省が多くみられた。それはある意味、私の反省でもある。各学年の役割を明確したいということを当初から言っていた。ある程度の分担は可能だし、その指示をするのはリーダーの仕事だと思う。しかし、「明確に」できるわけでもないだろう。だから、お互いが思いやりを持ち、主体的にどんどん仕事を奪ってもいいと思う。遠慮はいらないから。

新体制として最初の合宿であるから、体制の面での反省および考えが多くなってしま

ったが、今後もこのことについては熟考していきたい。そして、安全管理を徹底しながらも、個々人が成長できる機会を作っていきたい。

SL 蒲澤 翔

今年の新人合宿には6人の1年生が参加した。今まで10人以上の1年生を迎えていた合宿からすれば、上級生としては少し物足りないような感があった。まして今年は例年になく雪解けが早く、夏道が出ている箇所が多く、恒例の涸沢走りも距離がいつもより短くなってしまい残念だった。幸い涸沢カールには雪訓には十分な雪渓が残っていたので、雪訓はしっかりと行うことができた。また今年からBCの位置をいつもの場所から、横尾山荘に移すことになってしまったのは非常に残念だった。周りに人がいない静かな場所でBCを張れるのが新人合宿の魅力であったのに…。

SLとしての反省は、そもそもSLとしての仕事が無かったことであるが、それは3年生がしっかり隊を見ていてくれたからなので新人合宿としては良いことだったと思う。それよりも反省したいのは、実はこれを書いている時点で1年生の人数が3人に減ってしまった事だ。新人合宿でSACの魅力を伝えることができなかったのが、原因だと思う。山の魅力は変わらないのに、1年生にSACで山登りを続けたいと思わせる事が出来なかったのは残念だ。4年生として会や1年生をうまく盛り上げることが出来なかった。来年の4年生には1年生に山とSACの魅力を伝えられるような新人合宿を行ってもらいたいと思う。最後に今残っている1年生には同期の仲間を大切

にして、助け合ってSACを続けてほしい。

会3

植野侃太郎

今回の新人合宿は会3としての立ち位置を考えさせられる山行だった。1年、2年をまとめ、全体の危機管理やスケジュール管理をするのはそうなのだが、どこまで下に指示や注意をするのかを悩んでしまった。危機管理に関しては、気になった事は積極的に口を出すべきだろう。2年がカバーできなかった処をそれより上が補えば安全性は確実に向上するはずである。スケジュール管理に関しては、概要は2年に任せ、自分はその方針を修正するように動くのが良いと感じた。具体的には、雪訓の内容を2年に任せ、それを自分達と協議してスケジュールを決定し、現場において2年を指導に集中させ時間を自分が管理すれば良いだろう。やはり、緊密なコミュニケーションが大切だと痛感した。

また、今回北穂東稜に行った反省としては、当たり前だが時間を意識すること、先を見据えて行動することが足りなかった。天候は悪化傾向であり、滝谷から雲が上がってきていたのを見て焦った。後は、リーダーを決めるべきであった。まとめ役がいれば、時間を意識するのに役立つだろう。方針をしっかりきめる人間がいることが大切である。

大槻泰彦

今回で3回目の新人合宿であった。会3になり、目の前の1年生の指導をするという立場から、全体を見渡すべき立場へと変わったことを実感した。昨年の自分を思い

出すと、1年生にどうやって雪上歩行を教えるかということまで頭がいっぱいだったと思う。そのことを思い出して、雪上訓練中の安全管理にあたったつもりである。しかし、雪上訓練3日目のアプローチでの落石の際の対応など、まだまだ突発的な事故に迅速かつ的確な対処が出来ていない。合宿のように大人数で移動するような状況では特に「ここで落石が来たら」という想定を常にしなければならぬ。今年は3年目になりバリエーションルートに行く機会も増えるだろう。そうした山行の中で山に潜在する危険への嗅覚を磨いていき、安全に対する意識の面でこの先に待つ夏合宿や冬へとつなげていきたい。全体を通して、4年生に口を出させないくらいのスムーズな合宿運営ができるよう、隊の行動の流れなど、さらに広い視野と先を読む力を向上させていきたい。

城田曜子

3年目の参加となる新人合宿。会3としてどのような立場で臨むか、同期間でも曖昧なまま合宿がはじまってしまった。運営面での反省は、「口をださなすぎた」という点にある。2年生も上級生であるといえど、まだ2か月足らずである。それにもかかわらず、1年生への指導をはじめ、会3としてあまり口を挟むことをしなかった。命をかけて活動するのが我がSACであり、その一言を惜しんだがゆえに事故を引き起こすという可能性も無いとは言いきれない。そういった緊張感のある雰囲気作りをするのも、新人合宿における上級生の役割なのではないかと思う。2年生は3年生の仕事を、3年生は4年生の仕事を奪うくらいの働き

をすべきであった。

続いてバリエーション隊として行った北穂東稜について。前日にも取り付いていたこともあり、稜線にあがるまでと、ルートファインディングに関してはスムーズであったように思う。しかし、稜線に出からのザイルの扱い等の行動に大分時間を要してしまった。バリエーションの経験不足が露わになったゆえであると思う。また、個人的な大きな反省点は、危うく滑落をしかけたことである。雪稜の雪質が柔らかく、アイゼンが雪面にしっかり刺さっていない状態で右足を滑らしてしまった。これは自分の体力並びに歩行技術の欠如以外の何物でもない。1年生の模範であるべき上級生であるにも関わらず、このような失態をしてしまったことは、恥ずべきことである。歩行技術や体力にゴールはない。今後毎回の山行で自分の課題を克服し、事故を絶対に起こすことのないよう、気を引き締めていこうと改めて感じた。

山下耕平

今回で3年目の新人合宿であったが、3年生になり、また新しい役割として新人合宿を運営する立場となったことから、また違った反省があった。1番大きな反省としては、3年生としての立ち位置を会に明確に示すことができなかつた点がある。下級生の安全を守りつつ、2年生を指導し、4年生と連携を取りつつ会のまとめ役として立ち振る舞うべきであったが、前半は、2年生の傍観者になってしまった。それを4年生に指摘されたことで、後半では幾分か改善できたと思う。ある程度のことは2年生に任せるとしても、あくまで決定権、指導

権を持つのは3・4年生であるから、もっと2年生に口を出すべきであった。今回のように、3年生が傍観者となってしまうと、1・2年生には不安を与えかねないし、4年生は3年生に不信感を抱くこととなってしまう。自分たち1人1人が会の構成員であるという自覚を再確認し、同時に、3年生としての役割を自覚した。そんな新人合宿であった。

渡部優

【個人】

3年目の本合宿の反省は、会3としての“スタンス”が自分の中で曖昧で、会4や同期の発言、行動に多く助けられたことだ。各学年の役割をキッチリ線引きする必要はないが、ここでは場面を振り返って、「会3として最低果たすべき役割」を少しでも明確にしたい。

- ・1日目(徳本峠)：「1年ヤバそうじゃん、5分でいいから小休止とろうよ」
- ・3日目(BC)：「リーダー会の時間とか、進言していいから」
- ・5日目(涸沢アプローチ時の落石)：「ここにいてもしょうがない、進もう」
- ・5日目(ピッケルストップ)：「下で何言われた？整理して言ってみて」
- ・6日目(槍沢の下降)：「雪訓どおりじゃなくていいから早く歩こう」

そう言った発言、行動をすることで何を果たすべきだったのか？

- ・安全管理
- ・2年の目が届かないとこのフォロー
- ・非常時の適確な判断
- ・“隊”を動かす

それを果たす為に何が必要であったか？

- ・大局的視野(man to man でない視野)
- ・会 2 への指示出し
- ・会 2,4 との意志共有
- ・会 2,4 の間(ボーダー)の役割への気遣い
- ・確実な経験の積み重ね(1 年の様子の判断、選択肢のパターンを増やす、落石の流路の見極め…)

「責任持って任せる」と「責任放棄」は決定的に違う。上の学年の役割を果たして悪いことは何もない。上記を意識し、会 3 としての適確な発想、発現、行動を通して、隊に貢献していきたい。

[ヴァリエーション]

本合宿ではヴァリエーション隊として北穂東稜に行かさせてもらったが、悪天時の判断と、行動時間に課題が残った。(コースタイムを参照して頂きたい)具体的には

- ・「然るべき経験、方法、モチベーション」を持っていれば、いけないことはないコンディションであった。(実力不足)
- ・時間は、削る「箇所」(アプローチ、登攀パート、下降)を意識すべきだった。(漫然とではなく)
- ・ヴァリエーション隊内でのリーダーを決めるべきだった。(一本、下降中でなあなあな時間があった)

ヴァリエーションになるとコース自体の難度や天候などで、その場その場でのシビアな判断が要求されてくる。6 月以降の山行で「最善を尽くし、状況を見出す」ことを意識し、良い経験を重ねていきたい。

会 2

小山悠太

一日目 徳本峠までの道のりでは落石や狭い道の通過などを注意喚起した。執拗なま

で注意喚起したつもりであったが注意のマンネリ化や具体性に欠ける注意になってしまった。一年生は初めての歩荷であり歩くだけでも精一杯という状況にたんに「落石注意！」というだけでは足りないとおもった。一年生への行動面での指示や指摘が足りなかったとも思う。ガッシャーの背負い方であったり、一本の取り方であったりもっと教えてあげられた。徳本峠についてからエッセンまでの流れが二年生内で把握できておらず一年生や全体に指示を出すのにてまどってしまった。私は後発隊にいてテンバについてから先発隊に指示をもらい動いていたが、私の中でテンバについての流れがわかっていれば私から指示を出すこともできたはずである。エッセンについて初めての一年生はイメージがつかないだろうから手本を見せるということが必要であった。

2 日目 この日は私と藪内、植野さんで偵察隊として本体に先駆け出発した。起床は本体と同じで準備でき次第出発とし 10 分早く出発した。しかし 10 分ほどの差では残雪があったりして対応が必要な時に十分な対応ができたかは怪しいところである。本体と起床時間は同じでももっと出発を早めることは可能であったとおもう。

3-5 日目 横尾一涸沢のアプローチについて今年は本谷橋以降も夏道を使用しバシリの地点から雪渓に乗った。このことで一年生は雪上→バシリという流れになった。雪渓上の注意やクレパスなどバシリを行う前に確認できるものはしておくべきであったとおもう。

セクンについて。セクンは一年生の出来具合に応じて柔軟に対応するべきであ

った。会二のなかである程度のセクション三日間の予定を立てることも大切だが、実際は天候や一年生の状態をみて柔軟に計画を変えていく必要だった。計画したセクションを行うために一年生のセクションの事情を考慮できなかったことが反省である。優先されるべきは一年生の雪上歩行の習得であり、予定通りのセクションではないことである。

6日目 槍ヶ岳アタック

私は偵察隊として先行した。雪渓上を歩く経験が足りず歩く位置などを注意されることがおこった。もっと気を付けようと思った。雪渓は想像以上に硬くアイゼンを履いて登った。アイゼンのない本体は大変だろうなおもった。

槍ヶ岳には全員で立つことができてよかった。新人合宿で素人の一年生を槍ヶ岳に連れていくことはやはりただ事ではなかった。それだけ一年生には槍からいい景色が見えただろうし、私自身去年とは違う景色が見えた。

気象係

今回は横尾にBCを置いたので電波が入った。翌日の天気予報も見ることができた。気象係としての責任は例年よりも少なかった。より正確な予報が手に入るのは良いことだが、私の中で甘えが生じてしまった。実際にセクション三日目の前線による悪天を私は前日の天気図からは予期できなかった。天気図はかけるが読めない、とそんな悲しい状態ではスマホの電波が入らないところでは私は無力だ。天気図から予報する能力がもっと必要である。

天気図を一年生と書いたが一年生の天気図は壊滅的出来であり残念だった。しかし私の天気図も下級生に講釈垂れるほどのも

のではなかった。反省である。あと、横尾のテントサイトはAMラジオの電波の入りが悪くちゃんと場所を探す必要があった。それから、天気図を油性のペンで書くと裏面まで移ってしまいとても読みにくくなってしまった。

前田達樹

上級生となり、新人を指導、まとめる立場になったわけだが、自分に不足していることが何なのか、大いに実感することとなった。

会2となり、隊の先頭に立つことが何度かあったが、隊全体の見渡しや1年生の様子を把握をしきれていなかった。1日目の岩魚留小屋までの区間では、危険個所の後などで、隊内の間隔を空けてしまうことが何度かあった。また、槍の肩からの下りでは、1年生は雪上訓練をしたばかりで経験も浅く不慣れであるにもかかわらず、自分のペースで歩いたために、これにおいても間隔を空けてしまった。もっと意識的に後ろを見て、隊のメンバーの、特に一年生の、足置きや疲れ具合や歩行速度を考慮して、ペース配分をするべきであった。

雪上訓練では、理由づけた説明や動作の意味、結果の原因となることの説明が不十分であった。ただ蹴り込み強いや向きを正せなどと言うのではなく、何が原因でできないのか、それを行うために何を意識すれば良いのかななどをきちんと提示しつつ教えるべきであった。そうして一つずつ苦手をつぶせるように指導をするべきであった。会3の方が、新人への細かい指導をされることがあったが、自分達会2だけではすべて指導や説明をすることができず、その点で

も以上のことを実感した。雪上での、それらの動作に関する知識や深い理解が足りなかったために詳細な指導、説明が十分にできなかったのである。教える身としてはそれらをきちんと身に着けていかねばならない。

エッセン係での反省としては、主に3点である。1点目は、準備段階において、ペミカンを作り終える時間が遅くなってしまったことである。肉を事前に、すべて同時に持ってくればよかったものの、持ってくる際の入れ物の大きさから、2度に分けてしまった。肉を持ってくる入れ物の大きさを考え、時間短縮をはかるべきであった。2点目は、エッセンの内容が比較的イレギュラーになってしまったことである。初回エッセンである1日目夜と2日目朝ともに、イレギュラーなものであったために通常の流れ・方法で行うことができなかった。新人合宿は新人指導が目的であるため、まずは型に合ったセオリー通りの内容や方法を教える必要があった。3点目は、エッセン中の上級生の配置である。1年生は、それぞれ日ごとに別のエッセン内容ができるように配置を行えたが、それを指導する上級生の配置は、会2が固まっていったなどして偏っていたように思う。その場できちんと指示を出すべきであった。また、エッセン係に関係することで、冷蔵庫対策も必要であった。今回の被害としては、ペミカン1袋、酒類数本に穴が明けられたが、そうならないように頑丈にするなり見つけられにくい場所に置くなりして食料を守る必要がある。

今後の個人山行等でも、下級生に多く指導していくことになるが、自ら指導すること

で今まで行っていた動作をしっかりと考えることにつながり、深い理解になり得ようと思う。今後とも段階を踏んで下級生を成長させ、自分自身も上級生として成長していきたい。

村上友理

・装備係について

例年に比べて大幅に変更した点はないが、小雪のため穂先でFixがべた張りになることは考えにくかったのでガチャについてバリエーション隊中心の構成で去年よりも数を減らした。これについては、特に問題になることはなかった。穂先に雪がついていた場合でもハシゴや鎖は豊富なので個装でFixを張るには困らないのではないと思う。

主だった装備等の紛失は、3番の無線の電池パックが槍アタックで脱落したことのみである。これについては後日、オークションにて同型のものを入手した。おそらく、無線とショルダーハーネスの干渉によって外れたものであるが、今後無線を持つものは注意していただきたい。

今回、装備係として大きな反省は準備の初動が遅れたことだ。合宿装備係とbox装備係がしっかり連携する必要がある。

・個人の反省

今回、一番の反省は雪訓2,3日目に体調を崩し参加できなかったことだ。これについては原因がわかっておらず、今も若干の不安を抱えている状態である。会2の自分の一番の仕事は一年生に雪上技術を教えることであり、それを遂行できなかったことが最も大きな反省である。

アプローチや槍アタックでは思っていた

よりも一年生が頑張っていた印象があり、去年よりも時間帯としては早く行動終了することができたのではないだろうか。会 1 の一番近くにいるのは会 2 なので、常に会 1 の行動に責任を持つという姿勢が大切であると感じた。

心残りのある合宿にはなってしまったが、来年はまた別の立場で実りある合宿になるよう働きたい。

藪内鷹佑

今年の新人合宿は会 2 としてつまり 1 年を見る立場で挑むことになった。加えて、1 年の命を預かっている。正直に言うと、不安でいっぱいであった。そうこう言っているうちに新人合宿は始まった。例年通り島々から入山し徳本峠を越える。1 年生にとっては初めての歩荷であったらうし、SAC としては初めての山行である。そのような中、上級生として自分はどうかだったのか。重いガッシャーの背負い方、歩荷での歩き方、一本中の使い方など等指導面では上級生に助けられることが多かった。私の指導不足、経験不足があらわになった。上級生になったとはいえ、まだまだ未熟であることを思い知らされた。また、まだ隊全体を動かすという意識、配慮などもっと視野を広げる必要があった。雰囲気作りも大事で 2 年生である私たちが元気良く歩かなければ、1 年も辛く感じてしまう。自分のことで手一杯にならないようにしていきたい。1 日目のエッセンでは、右も左もわからない 1 年に対して細かく指導できていないことが反省である。丁寧に教えることが大切だった。徳本の下りでは偵察隊として下ったが、詳細な地形の把握、無線での

やり取りで的確な言い回しや、積極的に連絡をするなどが反省として挙げられる。

雪訓での反省は一方向的な説明にならないこと、具体的にどのようなところを直せばよくなるのか、説明が表面上にならない、自分自身が手本となって見せてやること等、大きな反省はこんなところである。雪訓での教訓として、1 年のダメな動きを自身でやることで改善点が見いだせることが挙げられるだろう。

槍アタックでの反省も挙げておくと、雪溪上のルーファイ、雪溪の構造の把握の甘さが挙げられる。雪溪の末端は間隔をあけて歩くべきだったし、クレバスと思われるところも平気で歩いていた。雪溪を歩くのであれば、もっと配慮すべきであった。槍の穂先では鎖フィックスをする場所しない場所の見極め、より安全な足置きの手配が足りていなかったと思う。また、フィックスのシステムの理解が足りていない 1 年生が多く、事前に説明などをしておくべきであった。

新人合宿が終わって、2 年生全体の反省は 2 年生の中でしっかりとリーダーを立てておく必要があった。2 年生間のコミュニケーションもまだまだ足りていない。もっと 2 年生の間で協力が必要だ。

会計・渉外反省

今年から新人合宿は横尾をベースとすることになり、横尾山荘のテント代がかかるようになった。そのため、例年より節約志向で考えていた。しかし、テントなど大きなものを買わなければ、特に資金が足りなくなる事態はなかった。大まかな資金配分をするとよいかもしれない。

山口耕平

終えてみればあつという間だった新人合宿、今回は指導する立場となり緊張もあったが、去年には感じられなかった種類の楽しさを感じることもできた。行動面の反省として、ルーファイの能力不足が挙がる。新人合宿では一年生を含む大人数のパーティとなる。全員のリスクが出来るだけ低くなるようなルートを考えねばならない。また、指示の具体性の乏しさも反省だ。ただ厳しくするだけではなく、まずは一年生がどうすればいいかハッキリとわかるような説明をすることが第一である。雪訓については、もっと一年生の事を考えて行くべきだった。一年生がうまくできない場合、その原因を考え、疲れが原因の場合は計画した時間通りでなくとも休ませる等の処置を柔軟に行っていくべきだった。また、気になる箇所が沢山ある場合も、一度に指摘しすぎては混乱の原因となる。一つ一つ丁寧に指導する必要がある。

医療係

団装のバンテリンパッドが不足していた。新人合宿は靴擦れや打撲、擦り傷が起りやすいため、それに対応する装備は多く持っていくべきである。また、一年生の体調ばかりを気にしていたが、上級生の事もっと気に掛けるべきであった。

記録係

前年度の記録を持っていくと行動決定の際の一助になると感じた。リーダー会においても記録係という自覚を持って議事録を取ることが重要だ

夏合宿

○行動記録

8月22日(0日目)前泊

今年の前泊は異例の立山駅。ハシゴ谷からの入山が困難であったことと、費用の問題から立山入山となった。駅の駐車場でテントを張り Pasta を食べた。

この日の天気は雨でしかも大雨であった。ムンムンとしたテントの中で汗だらだらになって Pasta を食べたが、反省でも上がったが、わざわざ Pasta を食べる必要もなかった。どこか途中で食べればよかったと思う。

8月23日(1日目)入山

6:40 : 立山駅 7:20 : 立山駅発 8:30 : 室堂着 8:55 : 室堂発 9:30 : 雷鳥沢 11:50 : 剣御前小屋 12:40 : 剣沢(B.C)

立山駅よりケーブルカー、バスを乗り継いで室堂から入山する。結果として剣沢定着となったが、この日の予定は剣沢までであった。剣沢までのコースタイムは3時間程度であり、黒部ダムから入山するより圧倒的に短い。一年生のガッシャーの重さは例年ほど変わらないが距離も行動時間も短いとなると、歩荷力をつけることに関しては不足したものとなった。危険箇所も少なく上級生にとっては楽かもしれないが、少し物足りない入山となってしまった。

8月24日(2日目)登攀1日目

3:30 : 起床 4:20 : 出発 5:30 : 平蔵谷出合 6:30 : 長次郎谷出合 8:15 : 岩小屋

○登攀

ルート : A フェース・魚津高ルート[3P]

メンバー : 渡部・藪内・高井

8:50 : 取り付き 10:40 : トップアウト

11:30 : 岩小屋

ルート : A フェース・中大ルート[4P]

メンバー : 山下・前田・佐藤

9:10 : 取り付き 11:28 : トップアウト

12:30 : 岩小屋

ルート : C フェース・RCC ルート[4P]

メンバー : 塩谷・加藤・小山

9:00 : 取り付き 10:30 : トップアウト

11:30 : 岩小屋

ルート : C フェース・剣稜会ルート[4P]

メンバー : 植野・山口・江川

9:00 : 取り付き 12:35 : トップアウト

16:00 : 岩小屋

ルート : D フェース・富山大ルート[4P]

メンバー : 蒲澤・村上

9:00 : 取り付き 11:10 : トップアウト

12:00 : 岩小屋

登攀一日目は SAC 全員で八峰に向かった。

偵察隊と本体に分けて行った。平蔵谷・剣

沢ともに通行不可能で右岸側の登山道から

長次郎谷へ行く。そのアプローチは非常に

悪く、フィックスロープや梯子、木道がそ

れぞれ設置されていた。フィックスロープ

のあるところは基本的に一年にはフィク

スをさせた。本隊が一隊で行ったため時間

がかかった。長次郎谷も崩壊が進んでいる

の見受けられ、ところどころクラックが走

っていた。例年より雪渓から右岸に渡る位

置も早く、右岸に渡ってからはアイゼンを

外しそのまま岩小屋まで行くことができた。

アプローチが長かったため一本程度しか登

れず帰ることになったが、行きの反省を生

かし、2 隊で戻った。後発は C フェース隊

の下降ミスにより大幅に戻ることになり、

辺りが暗くなる時間まで行動することとな

ってしまった。

8 月 25 日(3 日目)登攀 2 日目

3:30 : 起床 4:40 : 出発 (以降、熊ノ岩隊

記録)6:20 : 長次郎谷出合 8:20 : 岩小屋

14:30 : 岩小屋出発 15:00 : 熊ノ岩(B.C)

○登攀

ルート : A フェース・魚津高ルート[3P]

メンバー : 藪内・前田

9:10 : 取り付き 11:35 : トップアウト

13:00 : 岩小屋

ルート : C フェース・剣稜会ルート[5P]

メンバー : 山口・蒲澤・高井

9:15 : 取り付き 12:15 : トップアウト

14:00 : 岩小屋

ルート : D フェース・富山大ルート[4P]

メンバー : 渡部・山下

8:50 : 取り付き 13:00 : トップアウト

14:00 : 岩小屋

ルート : 本峰南壁 A 1 [4P]

メンバー : 塩谷・小山・江川

7:20 : 取り付き 10:25 : トップアウト

10:45 : 剣岳山頂

ルート : 八峰上半

メンバー : 植野・村上・佐藤

5:30 : 平蔵谷出合 6:43 : 長次郎谷出合

7:45 : 5.6 のコル 13:21 : 長次郎ノ頭

14:20 : 剣岳山頂 16:37 : 剣沢

アプローチの長さなどを考え、熊ノ岩隊(八

峰登攀隊)と剣沢定着隊に分けることとな

った。熊ノ岩隊は八峰に登攀したのちにベ

ースには帰らず、熊ノ岩に泊まり次の日も

八峰周辺の岩場に登攀し、剣沢定着隊の方

は別山岩場や本峰南壁の登攀、もしくはバ

リエーションルートに行った。

8 月 26 日(4 日目)登攀 3 日目

(熊ノ岩隊記録)4:00 : 起床 5:20 : 熊ノ岩出

発 5:40 : 岩小屋 10:40 : 出発 12:00 :
長次郎出合 14:00 : 剣沢(B.C)

○登攀

ルート : C フェース・剣稜会ルート[5P]

メンバー : 山下・藪内

6:20 : 取り付き 7:45 : トップアウト

8:50 : 岩小屋

ルート : C フェース・RCCルート[5P]

メンバー : 渡部・前田・高井

6:15 : 取り付き 9:00 : トップアウト

10:20 : 岩小屋

ルート : チンネ左稜線[10P]

メンバー : 蒲澤・山口

4:30 : 熊ノ岩出発 6:00 : 取り付き 9:30 :

T5 核心部 11:30 : トップアウト 12:40 :

熊ノ岩 17:15 : 剣沢(B.C)

ルート : 本峰南壁 A 1 [4P]

メンバー : 小山・大槻

7:10 : 取り付き 10:15 : トップアウト

10:30 : 剣岳山頂 12:20 : 剣沢(B.C)

ルート : 本峰南壁 A 2 [4P]

メンバー : 穂高・村上・江川

7:05 : 取り付き 10:20 : トップアウト

10:30 : 剣岳山頂 12:20 : 剣沢(B.C)

ルート : 別山岩場右岩稜[4P+2P]

メンバー : 塩谷・植野・佐藤

6:20 : 取り付き 9:00 : 北峰 10:00 : 取り

付き 12:00 : トップアウト

熊ノ岩隊は八峰 C フェースとチンネそれぞ

れの登攀を行った後、ベースへともどった。

剣沢定着隊の方は別山岩場、本峰南壁の登

攀を行った。

8月27日(5日目)登攀4日目

5:00 起床。この日は朝からずっと雨であっ

た。そのため、沈殿。

8月28日(6日目)登攀5日目

4:00 : 起床 5:25 : 出発

○登攀

ルート : 本峰南壁 A 1 [4P]

メンバー : 加藤・前田・藪内

8:00 : 取り付き 10:30 : トップアウト

10:50 : 剣岳山頂 13:35 : 剣沢(B.C)

ルート : 本峰南壁 A 2 [4P]

メンバー : 村上・小山・高井

7:55 : 取り付き 10:25 : トップアウト

10:50 : 剣岳山頂 13:35 : 剣沢(B.C)

ルート : 別山岩場[3P]

メンバー : 蒲澤・江川・佐藤

6:00 : 取り付き 9:00 : トップアウト

10:00 : 別山 11:00 : 剣沢(B.C)

ルート : 別山岩場・中央稜[3P]

メンバー : 山下・山口

6:00 : 取り付き 6:20 : ルーフアイミスに

よりルート変更 8:30 : トップアウト

10:00 : 別山 11:00 : 剣沢(B.C)

ルート : 別山岩場・中央稜付近[4P]

メンバー : 塩谷・大槻

6:00 : 取り付き 9:00 : トップアウト

10:00 : 別山 11:00 : 剣沢(B.C)

ルート : 別山岩場・左岩稜付近

メンバー : 塩谷・山口

※それぞれの登攀を終えたのち追加で行っ

たものである

メンバー : 塩谷・山口

前日の天気予報では雨となっていたが合宿

一番の晴れとなった。本峰南壁と別山岩場

の登攀を行った。しかし、想定の甘さによ

り八峰隊を出すことができなかつたのは否

めない。

8月29日(最終日)下山

4:00 : 起床 5:10 : 出発 5:45 : 剣御前小屋
6:35 : 雷鳥沢 7:25 : 室堂

入山と同じルートで隊を分けることなく室堂に下山をした。入山と同じく下山もあつけないものであった。

○各係の反省

装備（ガチャ）係

担当：小山 悠太

装備係の仕事内容は主にガチャの把握とパーティー分けだった。まず各キャンパスに分配されているガチャを集め今回は6つに分けた。カムは1セットはICIの佐藤OBに拝借した。各セットはカム6つとナッツ6つ、ナッツキー1、団装ガチャ安環1、カラビナ4、スリング60cmが3、120cmが1、スポーツヌンチャク5、アルパインヌンチャク4、となった。配分については登攀を行ううえで不足はないように思えた。ガチャにはカラーテープを巻き現場での混合防止と判別をしやすくした。ロープも6セットとフィックス用を持って行った。

係の反省は一番は動き出しの遅さだった。今回合宿前に60のダブルロープを購入することが決まったが私の動き出しが遅く合宿に間に合うかどうかギリギリになってしまった。ガチャも合宿準備以前の段階で各キャンパスに散っている分を集め把握する必要があったができなかった。60のダブルロープは比較的珍しく店頭在庫はほぼないものらしい。佐藤さんから借用するカムも前々からアポをとり合宿準備には間に合うようにするべきだった。準備の時にガチャの状態の確認も不足だった。具体的にはビナのゲートの可動や、ロープの損傷など

である。

医療係・気象係

前田 達樹

続いて、医療係・気象係としての反省点を示す。医療係としてはまず、誰も大きな怪我もせず無事合宿を終えられたことは、大変良かった。これまでの合宿との違いとしては、行動用・ベース用に医療缶を分けたこと、虫よけスプレー、虫刺され薬を用意したことであるが、これらが利点であれば今後の合宿でも続けていけば、と思う。ただ、ベース用医療を使うには団装テンから取りに行くという手間が生じてしまう。行動中は使わない医療は置いていき、医療缶がシンプル・軽くなるのは利点である。虫よけ、虫刺され薬の効果は多少見られたのは良かったが、用意する本数はもう少し少なくてもよかったと思う。気象係としては、予測の難しさを大いに痛感した。登攀5日目は、その前日でのあらゆる天気予報サイトは雨予報、自分も寒冷前線のかかり具合から雨と予想し、帰ることが半ば決定していたが、実際は思いっきり晴れた。前日に晴れを考慮していれば、登攀の内容や気持ちも変わっていただろう。このように、天気を予測することの難しさを大きく感じた。今回は剣沢キャンプ場ベースであらゆる天気予報サイトの情報を得られたが、毎回そのようなことは当然ない。ネットが通じない状況であれば気象係、ラジオ天気図の重要度は増す。そして、天気によって行動は左右される。そのためにも、天気図からの予測の向上を図らなければならない。

会計、渉外係

村上 友理

今年は、雪溪の状況のためイレギュラーな入山・下山となった。こういう時に会 3・4 の先輩方の判断の補助となるような情報を提供するのが涉外としての大きな仕事であると思うので、改めてこの係の重みを感じた。

剣沢のテンバ代がどれだけと泊っても 1 人 1000 までしかかからないという情報を持っていなかったのは反省である。また、真砂沢にベースを移す可能性があったため、各日で更新をしなければならなかった際、自分の帰りが遅くなる時はベースに早く戻った隊にその手続きをお願いすることがあった。無線でお願いするのではなく、あらかじめお願いできればなおよかった。

装備(生活)係

藪内 鷹佑

まず最初に準備の段階での反省であるが夏合宿では無線を使うことが多く、非常に大事な役割を担っている。SAC の無線は近年調子の悪い無線が多いため、修理などをすべきであった。結果論としては無線の調子がいいものを長距離に使用するなどその場でやりくりしたが不都合も度々起きている。無線は直せるのであれば直すべきである。また、準備の日であまり人を動かすことができなかった。生活の装備においても、細かいものも多いため、人材は最低限度確保すべきである。

合宿最中での反省としては、細かい指示が不足していた。ポリタンを各テントにどうすべきかなどが不足していたと感じる。この合宿の一番の反省は熊ノ岩隊と別れるときに団装の一つであるチンネ隊のコツフェ

ルセットを忘れてしまったことである。いろいろと面倒なことになってしまい、反省している。

記録係

記録の仕事としての反省としては、一日ごとに記録を取り、その日の内にまとめ消化することが大事であった。やっておかないと合宿後にまたまとめなおさなければならぬため二度手間になってしまう。また、最終日には記録帳をシュラフと一緒にしまい記録が取れなかった。今後とも無いようにしたい。

エッセン係

山口 耕平

今回の最大の反省はBOXにある物資を買い出しの前に確認していなかったことである。このことにより無駄に買ってしまったものや不足したものが出てしまった。このような無駄を避けるため事前の確認は必ず必要であった。また、長期にわたって使用する米等はたくさん買っておいても無駄にならないことに留意すべきであった。

○個人の反省・感想

・会 4

CL 塩谷 晃司

抜けるような青空の下、花崗岩のリッジにロープを引く。眼下には剣沢の BC が見え、ラジオ体操まで聞こえてくる。それは実に爽快で、かつ安心感もあったが、同時に私はどこか「もの足りない」気分を拭えずにいた。

今年の剣は寡雪と融雪の速さで、例年と

は全く条件が違う。それでも最善を尽くせば充実感を得られるだろう、やれるだけやろう。そんな思いで合宿に臨んだ。7日間終え、私の胸に充実感があったが、それと相反する感情も確実に存在した。その感情を自分なりに分析すると、環境に依拠するものと、自分自身の判断に依拠するものに分かれる。

前者の例を挙げると、天候、雪渓の状態で、これによってダムからのアプローチ、真砂沢ベースが選択肢として取りにくくなったことである。剣沢をベースとしたことは妥当だったと思うし、熊ノ岩泊隊を出したのもよかったと思う。イレギュラーな判断が続いたが、状況に応じて概ね対応できたと思う。この「もの足りなさ」は例年と比べて、ということであって、ある意味仕方がないことだと思う。

後者は特に登攀最終日、八ツ峰隊を出さなかったことである。天気予報に踊らされた。予報に反して天候がよく、別山岩場と南壁を出した。別山はアプローチ至近で、八ツ峰は途中雨が降る可能性もあり、わり合わないだろうという思考だった。

序文に続くが、私は登攀中考え続けた。そんな考えで登山をやっていたのか。全力を尽くしているか。なにより過程が大事ではなかったか。行かない理由はいくらでも思いつくが、自分の目で見て判断することを怠った。そこが、本合宿一番の反省であり、気持ちが晴れない理由である。

剣沢は快適だ。電波も入るし、入下山も楽で、おまけに快適な岩場もある。だが、利便性だけでもものを見ないでほしい。1年生の時にダムから入山して、自分の荷物を担ぎ切ったことは自信になった。毎日長次

郎谷を往復するのにも意味がある。体力と歩行技術があつてこそだと思ひし、信大はそういうスタイルを貫いてきた。その流れを継承する義務があるし、なにより登山本来の喜びとは、利便性などとはかけ離れたところにあるのではないか。

以上、主に所感を述べたが、少々長くなってしまった。具体的な反省としては、リスク管理にはもっと慎重になるべきであった。各地に隊が散らばるのはリスクになるので、上級生の分配など更に気を配る必要があり、責任者どうしのコミュニケーションも不十分であった。1、2年生は体力と歩行力、3年生は登攀力に課題がある。各自、目的意識をもって今後の山行に臨んでもらいたい。

SL 蒲澤 翔

今年は雪解けが早く、黒部側からの入山が出来なかった。毎年合宿の入山は苦労もあるが、その分いい経験にもなるので、室堂からの入山になってしまったのは残念だった。また、剣沢や長次郎谷、平蔵谷の雪渓も状態が悪かったので例年以上に雪の状態には気を遣って岩場にアプローチすることになった。今年は夏合宿の中でチンネや別山岩場に登ったり、熊の岩にビバークするなどの自分が入会してからは初めての試みができることはよかった。来年以降の夏合宿でも柔軟な計画を立てて、充実した夏合宿を行っていきたい。

今回の夏合宿の反省としては、2年生と二人のパーティーを組んだ時に、周りに相談せず2年生にリードさせてしまった事だ。合宿の前の話し合いで、2年生のリードは

一度行ったルートに限ることにしていたが、それを破ってしまった。もちろん普段の岩トレやフリーの様子から十分にリードできると判断したからだったが、全員で決めたことを相談なしに破るのは間違っていたと思う。今後は会の話し合いを尊重し、その場の判断でそれを覆すようなことはしないと誓う。異論があれば、その場か後日になっても、話をして決めるようにする。

もうひとつの反省としては、今回剣沢と熊の岩で2隊に分かれて1泊することがあったが、その際の連絡をもっと密に行うべきだったし、各エリアごとのリーダーを設定していけば良かった。

チンネに行って思ったのは、他の岩場と比べて格段に難しいわけでもないし、アプローチもそれほど遠いわけではないので夏合宿の機会に行くことが出来ればいい経験になるという事だ。ただし左稜線は10p近くのルートであるし、周辺の内容が掴めていないと、アプローチや下降で思わぬ時間をとられることも考えると、初めて行く場合は熊の岩等で一泊する計画にした方がいいと思う。また行ったことがある者がいても、最低限の食料やビバーク装備は近くにデポしていくといいと思う。

加藤 穂高

いつの間にか4回目の夏合宿。今年こそはDフェースの富山大ルートと意気込んでおりましたが天気予報に踊らされ今年も登れませんでした。

入山前は絶望的な週間天気予報だったので富山入下山の剣沢ベースという塩谷リーダーの思いつき、通称「T.T.プラン」は良い判断だったと思います。アルペンルートを使

う扇沢入山に比べて車で富山まで回った方がお得だったのは驚きでした。ただ剣沢ものすごい電波入るんですね。結果的にスマホの天気予報に踊らされ、悪天警戒して別山や南壁など近場で遊んでいたらめっちゃ晴れて「八ツ峰行けたじゃん！」みたいなことがありました。どんな天候が予想されようとも突っ込むべきだ、とは思いますが可能性がゼロでない限り気持ちは折らさずにいないとだなと思いました。実際「八ツ峰行けたじゃん！」の日は前夜からすでに諦めモードで朝もゆっくり起床でした。雨の中でも早く起きてアプローチしていれば八ツ峰も登れたらと思うけど、もう気持ちが折れていましたね。

個人的反省は体調管理になります。夕飯と朝飯が全く食べませんでした。なによりペミカンを食べるのが久しぶりでちょっとウツてなっていました。話は変わってクライミングについて、自分のリードは遅いんだなと実感させられました。八ツ峰ではたった2ピッチのルートに1時間半以上かかり、南壁では隣のルートの2年生リード3人パーティーに抜かれました。さらにダブルロープで2人フォローを引き上げるという行為が久しぶりでなんだか緊張してしまいました。自分の反省は総じて最近山に行ってなかったことに原因があると思うのでもっと山に入らないと冬はやっていけないなと痛感いたしました。山に行けないなら辞めちまえですね。

最後に他の人の反省文にも出てきているでしょう八ツ峰5・6のコルへ下降できず道迷い。遭難の始まりってきっとこんな感じなのでしょう。間違った道をけっこう下まで下ってしまったようですが、「こっちは

なくね？」とかおかしいと思ってた奴は絶対いたと思うんですよ。先頭も不安なままでも言い出せず歩いていたのでしょうか。小さなミスも放っておくと大惨事になってしまいますね。「ちょっと戻ろう」「間違えちゃった」で済むうちに軌道修正したいものです。反省会でまとまった「迷ったら戻る」これに尽きると思います。

・会 3

植野 侃太郎

今年の夏合宿全体における反省として第一にあげられるのが、登攀一日目の道迷いである。下級生の安全を預かる身としてあってはならないミスだった。第一の原因として自分の剣稜会のリードが遅かったのが原因である。初めて登るルートとはいえもっとルートを見定めて迷わず素早く登れるようにしなければならない。次に下降時、焦ってしまった事、しっかりルートが分かっていたいなかった事が原因である。焦りに囚われ引き返す判断が非常に遅くなってしまった。これでは、下級生の命を預かる資格は無い。猛省である。

今回の合宿全体としては、可能な限り登攀をしつつ、事故無く終えられたことは意義があったと思う。長次郎谷が通行できなくなってしまったのは残念であったが、通行しないという判断は正しかったと思う。来年はどうなるかはわからないが、今年の経験を生かしていきたい。

大槻 泰彦

今回の合宿は途中参加であったため、下山を含めて 5 日間の合宿であった。入山日を除いた登攀日 3 日中 1 日が雨のため沈殿

となり実質 2 日しか登れなかったため、新しい経験を積むということがほとんどできなかった。この穴は 10 月にいくつか登攀系の山行に行行って埋めていきたい。登攀自体は、本峰南壁 A1 稜のフォローと別山岩場中央岩稜のリード・フォローであった。別山岩場では、3 ピッチのリードの後フォローで核心のコーナークラックを抜けたが、リードの 3 ピッチはたいして難しいわけではなく浮石が多いのと傾斜の変化が多いだけであったが、時間がかかった。想定していたルートが思ったより悪いときに考える時間が長いのが主な原因と思われる。ダメだった場合の次以降の選択肢をその場でなく前もって見つけておく能力が不足している。今後の山行の課題である。

全体的なことの一つ気になったこととして、1 年生が余裕をかましているような印象を受けたことが挙げられる。八ツ峰まで往復した日は疲れていて当然だと思うが、それ以外のアプローチの短い日はまだ体力に余裕があるように見えた。しかし、歩きを見ていると浮石を頻繁に落としたり、滑ったりするなど雑な様子が見受けられた。生活面でもプレ火や片付けが遅い、個装の整理が雑というようにまだまだ身についていないと思われることが多い割によく談笑していたり軽口をたたいていた印象がある。1 年はまずこれまで教えられてきたことを完璧にこなせるようにしていくべきであり、出来ていないうちに余裕をかましているのを厳しく注意しなかったのは上級生の怠慢であったと思う。冬は上級生が厳しくしようがしまいが山そのものが厳しく、甘い気持ちでは死につながることもあるということを 1 年生にも考えてもらいたいし、会 3

として冬山 3 シーズン目に向けて何をしなければならぬか、何を出来なければならぬかを考えながら 9~11 月の山に向かっていきたい。

山下 耕平

私の今回の合宿の反省は、岩に対する弱さが出てしまったことである。もともとそんなに岩登りは好きではなかったが、意図的にクライミングを避けてしまっていたことから、会 3 としての登攀力の欠如は否めなかった。D フェースのリードを、自信がないとあって避けてしまったし、最終日の別山岩場でも、自分のルートファインディングが未熟であり濡れ濡れの場所に突っ込んでしまったりと、登攀力だけでなく、判断力も未熟であった。これからの課題として、もっとジムやフリーに行き、確実なクライミングの能力を高めていきたい。

3 年生としての反省としては、もっと 1 年生や 2 年生に対して確実な指示を出し、安全面での配慮をするべきだった。例年に比べ雪渓の状態が悪かったり、長次郎谷までのアプローチまでの道も悪場が多かったりと、下級生には気を使わせる場面が多かったが、3 年生としては、適切に注意喚起をし、安全管理にもっと気を配ることが必要だったと思う。

渡部 優

今回の合宿では、ベースを剣沢に張った都合上、フェースへのアプローチの時間が往復 7 時間かかるという問題が生じた。その中で会 4 の提案により、熊の岩でのビバークや別山岩場の利用などによりうまく対応がとられた。合宿の従来の形式にとらわれ

ることなく、合宿をまわす様がとても参考になった。個人的なところでは、D フェース富山大、C フェース RCC ルートでのルーファイミスがあり、改めてアルパインでのルーファイの難しさを感じた。

・会 2

小山 悠太

今回の合宿は立山を入下山口にしたことで体力的な疲労はなかった。しかしアプローチの問題から私は八ツ峰フェースに 1 日しか行けなかったのは残念である。登攀 1 日目は C フェース RCC ルートをフォローで登った。登攀の難易度は優しく初日にはちょうど良いものだった。しかし八ツ峰特有の高度感がなく少し物足りない内容だった。2, 3, 5 日目は本峰木南壁に行った。2 日目にはリードをした。本チャンでのリードは考えることが多く大変だった。南壁はリッジ上に行くルートでロープの流れを考えないといけないので支点の取り方やピッチの切り方が重要になってくる。そういった経験ができたことは本当によかった。

前田 達樹

夏合宿での反省点を示す。まず一点目は、悪場や雪渓での通過に関してである。会 2 になり隊の先頭で歩くこともあるわけだが、その時にいかに歩きやすいところを歩くか、つまりは滑りにくい、落石しないところを選択して行かなければならないが、それが完全ではなく、不安定なところに行ってしまうことがあった。それでは少なからず危険である。剣沢では先の状況を二手に分かれて偵察するという時、自分が落石の危険

性のある所に入ってしまうということがあり、自分の危険に対しても注意しなければならない。今回は剣沢通過でロープやはしごが多々出てきたが、安全な間隔を空け、それと同時にスムーズな通過ができるよう、後続への適切な指示も必要である。雪溪の通過は、雪溪状況が日に日に悪くなる中、どこから乗ったらいいか・降りたらいいか、間隔はどのくらい空けるべきか、など、上級生に指示をもらうことがあったが、それらを自分でもっと見極められるようになることが必要である。悪場や雪溪での一年生への注意喚起は、通過が苦手でまだまだ経験が浅いということもあり、もっと多くしてもよかったと思う。二点目は登攀に関してである。今回の合宿ではリードをすることがなく、結果、リードの経験を全く積みなかった。また、技術に関して、他の会2がリードしているところでも、自分では怖くリードできないと思い、技術的に未熟であると感じた。今回リードはしていないが、支点の選択や構築、ルート選び、それに伴う、登る速さはきっと遅いだろう。クライミングやリードの技術は、フリーや岩トレ、ジムなどで練習していくほかない。三点目は、二日目の八峰登攀後、岩小屋にアイゼンを忘れたがために雪溪通過ができず、後続にとってきてもらう、ということを引き起こしてしまったことである。これにより、隊と一緒に待ってくださった穂高さんには大きな迷惑をかけてしまった。本来ならば後続が来る、などということはなく、自分で取りにいかなければならない。こうなれば、隊の分裂や時間経過による天候悪化など、本当に危険である。忘れ物という、犯してはならないことをしてしまい、多大な

反省点である。

村上 友理

夏合宿のメインは登攀であるが、変則的に予定が変わる中、4日間登攀し、うち、3日間はリードも経験させていただけたことはよかった。特に、上半縦走では、パーティーで自分だけ行ったことがあり、自分が引っ張って成功させることがこの合宿での大きな目標であったのでそれができてよかった。ただ、上半で一緒だった女性二人(おそらく片方はガイド)のパーティーに対し自分たちはロープを出すポイントで明らかにペースダウンしてしまった。一年生を連れている場合、積極的にロープを出すスタンスは間違いではないと思うが、その中でシステムの選択やザイルワークに改善の余地は多い。

岩に登れることは SAC において大前提である。来年の合宿に向けて登攀能力を向上させたい。

藪内 鷹佑

今年の夏合宿は会2として参加することとなった。新人合宿と同様、会2が主体となって動かなければならない。準備の段階から振り返ると、上級生にも注意されたことだが人をうまく使えていなかったと言える。人がその場にあまりいなかったともいえるが、人材の確保をすべきでもあった。もっと人を起用することができたら円滑に準備を行うことができたと思う。

合宿ではいつもと違う立山駅が前泊地であった。しかも、時より激しい雨も降ることもあって、テント設営やエッセンが少々大変であった。1日目の歩荷は例年より少な

かった。ガッツシャーの重さも夏縦走とそれほど変わらなかったため、余裕を持って歩けた。また、道もしっかりしていたため、はしご谷ほど悪くなく、歩きやすかった。1年の歩荷強化、そして重さに対する自信をつけることはあまりできなかった。やはり1年の体力もまだまだと感じる。登攀に関しては、A フェース魚津高ルート(フォロー&リード)、C フェース剣稜会ルート(フォロー)、本峰南壁 A2(フォロー)に行くことができた。今年は剣沢ベースであったため八峰のアプローチが大変であったが熊の岩で一泊したことにより3日も八峰に行くことができた。アプローチでの反省であるが先頭を歩いている時、1年が辛そうにしており、一本取るタイミングで取らなかった時があった。この時、しっかりと上級生に伝えるべきであった。いくら上級生であっても、1年をしっかりと見ているのは2年である以上、1年に対する対処もしっかりすべきであり、しっかりと上級生主張すべきである。次に登攀での反省であるがまだ、落石に対する意識を厳にすべきであった。細かい落石をたまに落としたりしたりしたためもっと気を付けたい。また、岩稜帯の歩きに不慣れということもあり、今後バリエーションに積極的にいきたいところである。魚津高のリードは本チャンでの初リードとなったが、非常にいい経験となった。ザイルの流れももう少し改善する余地もあったし、ナチュプロの取り方としてもあまい個所があった。日頃の岩トレでしっかりと鍛えていきたい。今回2としての反省として挙げたいのが1年に対して指導するにあたって、その場でしっかりと注意すべきであった。夏合宿ではバリエーションや登攀を行

うわけであり、危険なところにも当然行くわけである。その為、危険個所での指示は的確にそして細かく言うべきであった。加えて、もっと落石などの注意もいつも以上させてやらなければならなかったと思う。

山口 耕平

今年の夏合宿は例年とは状況が異なったが、自分としては充実した合宿であった。今回の最大の反省は、登攀初日に八ツ峰C フェースからの下降点を探す際、全く異なった地点へ行ってしまったことだ。この原因の一つとして、違和感に気付くのが遅いということが挙げられる。もっと早く違和感に気付けば早期に引き返すこともできた。違和感に気付くのが遅い理由として、事前の概念把握の不足と自分でルーファイするという意識の不足が挙げられる。下降点を探す際、自分は先頭を歩く場面があったにも関わらず、他の上級生を頼りきっていた。上級生の自覚を持ち、今後は常に自分で考えて行動していくようにする。また、違和感に気付いた後の対応として、自分たちは今いる地点からトラバース気味に懸垂下降し、そこから登り返すという手段をとった。しかし、下降できる地点があるかどうかとも怪しい地点で懸垂下降をするのは非常に危険な行為であった。違和を感じたら引き返すという基本原則に従うべきであった。今回身に染みて感じたのは、ルーファイの際選択肢を残らず考え、分からなければどれかに突っ込まず、立ち止まって考えるべきだということと、違和感に対して敏感になり、間違っていると思ったら必ず引き返すべきだということだ。登攀三日目に行ったチンネ左稜線では、アプローチの悪さも含

めてアルパインの難しさと面白さを感じた。来年には自分が連れていく立場としてチンネ左稜線に挑めるよう努力していきたい。

・会 1

江川 夏

今回の夏合宿で、真っ先に自分の反省として挙げられるのはやはり登攀初日の道迷いだろう。合宿終了後の反省会でも述べたが、あの時の自分は「どうにかなるだろう」「先輩がいるから大丈夫だろう」という考えばかりで、自分からどうにかしようという意志が全く欠如していた。

当日一緒のパーティーだった二人の先輩は口々に「危険な目に合わせてしまってすまない」と言ってくれたが、この責任はもちろん先輩のみにあるわけではない。自分ももっと積極的に関わってゆくべきだった。SACに入ってから半年近く経とうとしているのに、未だに「連れて行ってもらう」という意識が抜けきっていない。それじゃだめだ。自分で考えて、自分で判断して、自分で動かないなら意味がない。それがこの合宿でできなかったことがとても口惜しい。

もちろん技術や知識が不足していたというのもあるが、それらは主体的に山に取り組まないと身につかないことだと思う。行動中に地図をみなけりゃ読図は身につかないし、ただラジオを聞いて天気図を書くだけでは天気図を書く技術は得られてもそこから天気を推測するなんていつまでたってもできない。先輩に言われたことをこなすだけでは（それすらも十分できているとはいえないのだが）いずれ上級生になった時、

後輩に指示を出すことなどできない。その指示の意味を考え、理解しながら実行して初めて、それが意味のある行動になるのだと思う。

一年縦走を始めとした今後の山行では、この反省を踏まえ、自分が引っ張ってゆくつもりで主体的に行動したい。

佐藤 優

今回の夏合宿の反省について、歩荷、登攀までのアプローチ、登攀に関して、の三項目について主に述べていきたい。

・歩荷について

初めにパッキングについて、歩いている途中でザックが傾くことは無くなったものの未だに下の方に余地が有り十分に空間を使い切れてはいない。次に体力についてだが、今回の合宿は室堂からの入山であり、いつもよりも歩く時間は短かったもののそれでも登りを終える頃にはバテてしまった。今後冬においては更に荷物も増え、ラッセルなどより体力の消耗することなども増える。今のままでは危険にも綱がるため、9,10月の目標としては体力の増強を一番に考えていきたい。

・登攀までのアプローチについて

アプローチ中に感じた最も大きな反省点はガレ場での歩き方である。ガレ場において落石をしないことを言われてはいたが、それでも少なからず大きな落石をしてしまった。その理由としては、足の置き方が雑である、後ろ足で蹴り過ぎている、一気に足を置いている、などの理由がある。こ

れまではあまりガレ場を歩くことは無かったが、一年も半分をきり、来年はより一層ガレ場を歩く機会が増えることを考えると一つ一つ意識して改善していく必要がある。

・登攀に関して

登攀に関しての最も大きな反省は、ヌンチャクに掛かっていたカラビナを落としてしまったことである。幸い今回は登攀に支障は出ず、カラビナも回収することが出来たが、もしかすれば登攀が出来なくなるかもしれない可能性もあったため非常に反省している。原因としては何も考えずにただヌンチャクを外していたことが挙げられる。今後は外す前に何か落ちる物はないかをよく確かめていきたい。

高井 野乃子

○反省点

・体力不足が原因で悪場の歩行が遅くなったり、前の人との間が大きく開いてしまったりした。→冬に向けて山を歩ける体力をつける。・登攀のシステムが完全に覚えられていなかった。→命がかかっていることをもっと意識して一つ一つを考えてやる。

○上級生から注意されたこと

・なにも考えずに歩きすぎ →歩くだけでいっぱいにならない体力をつける。・登攀はゆっくり丁寧にし、足のテストもしっかりやる。→フォローであっても絶対に落ちてはいけないという意識をもつ。・前について行こうという気持ちが足りない。→前の人について行くという気持ちだけは途切れさせない。・声は1発で届くようにする。→音の反射なども利用して声が1回で届くように最初に1番大

きい声を出す。・天気図がまだ書けていない →下界で天気図についての勉強を怠らせずにやる。

○次に向けて

圧倒的に体力(歩く力や歩荷力)が足りないことを痛感した。何よりついて行こうという気持ちを保ち続けられない気持ちの弱さがあった。これは今後ずっとついて回る私の課題になると思うので山行、1日、1ピッチごとでも目標を立てながら努力していきたい。また、登攀に関しては自分の命も他人の命もかかっているという意識が足りなかったように思うので朝の岩トレはもっと本番を意識して登る。

上級生雪訓(大谷原)

日程：2016年4月10日

メンバー：会4：塩谷、蒲澤、加藤

会3：植野、大槻、城田、山下、渡部

会2：小山、前田、村上、藪内、山口

行程：大谷原~西沢

行動記録：

6:20-7:00 大谷原~9:30 雪訓開始~17:00 雪訓終了~18:00 大谷原

大谷原まで全く雪がなく、雪訓ができるのかと不安になる。駐車場でコンテの説明し、そこから少しコンテで行動。きりの良いところでロープを外し、西俣出合まで。ここまで来ればそれなりに雪はあり、雪訓はなんとかなりそうだ。北股本谷はすでに水流が露わになっており、徒渉を強いられる。4年は飛び石で行けたが、2、3年は不用意なリスクは避け、裸足で徒渉させた。出合から標高差100mあたりで適地を見つ

け、3パーティに分かれて雪訓開始。

午前中は雪上支点、スタンディングアックスビレイを行った。2年生に対する指導は3年生を中心に行わせたが、ポイントはよく押さえていたと思う。ただ、支点の強度チェックの際、バックアップを取ることを忘れていたことが気になった。

午後は2年生の1年生指導の練習を行ったが、雪訓の内容を理解しておくよう事前に言っていたにも関わらず、理解の甘さが目立ったことは遺憾だった。肝心の指導方法に関する助言を十分にすることができなかった。また、fix、引上げ、梱包・搬送の確認も行い、最後にこの日にやったことすべてを流れの中でやらせてみた。前半は2年生中心の内容で、後半のレスキューの訓練は3年生リーダーのもとに行った。リーダーの役割がしっかりできていなかったこと、応用力のなさが反省として挙げられた。今後も、時間をとってこのような訓練を続けていきたい。

《個人山行》

◎4月

北八ヶ岳縦走

日程：4/16~4/17

山域：北八ヶ岳

メンバー：藪内(CL)、小山、村上、山口、前田(会2)

4/16【晴れ】

5:25 松本駅集合

8:15 渋の湯出発

9:54 黒百合ヒュッテ

10:37 中山峠

11:38 西天狗山頂

12:50 中山峠

13:28 丸山

14:00 高見石小屋

14:53 T.S.

渋の湯からは雪は全くなく、氷の道が続いた。歩いて、30分ほどでアイゼンをつけることにした。夏道、トレースはばっちりであった。特に道がわからないということも無くスムーズに進んだ。黒百合ヒュッテでは藪内の靴擦れをしていたためテーピングをしたりなどで少し一本が長めになってしまった。中山峠との分岐に不必要な荷物はデポし、ほとんどが空身の状態で天狗岳にアタックした。天狗岳の上部付近までは腐った雪が続き、上部は岩肌が見えていた。東天狗岳の西面に関しては雪がなかった。そのような状態であったため、アイゼンを履いたり外したりの繰り返しだった。中山峠に戻り、中山を越え、高見石小屋まで進んだ。道の状況としても『春の雪』と感じさせるものだった。高見石小屋ではここで泊るか進むかを考えたが次の日の天気が悪いことがわかっていたため一時間ほど進むことにした。テントサイトはピーク 2212の手前あたりにした。以上が1日目の行程である。

4/17【曇りのち雨】

4:30 起床

5:37 出発

6:31 茶臼山

7:05 縞枯山

7:31 坪庭

8:07 北横岳

8:54 ロープウェイ山頂駅

9:52 ロープウェイ山麓駅

起床し、外の天気を確認したところ、雨も

降っておらず、2、3時間ほど持つと判断し、出発する。麦草峠を越え、茶臼山の登りに取り付く。登りで前田が大きく遅れる。体調が悪いわけではなかったが、硬い氷に対する歩きが不得手であったため、バテてしまったようだ。そのため、前田にアイゼンを履かせる。アイゼンを履いて以降、大きく離れることはなかった。茶臼を越え、坪庭まで一気に下る。天気は悪化していたが北横岳のピストンができないほどではなかったと判断し、不必要な荷物はデポし、アタックした。一部の道が凍結していた。この時、メンバーのほとんどがアイゼンを装着しておらず、登り・下りともに苦戦した。山頂では風が非常にきつく、すぐ降り始める。北横岳ヒュッテまで降りたところで雨脚が強くなる。坪庭に降りる頃には本降りだった。ピラタス横岳ロープウェイ山頂駅にて一本を取り。帰途につく。1ピッチ程度で下界に降りた。

感想・反省

1日目はピーカンでとても天気が良かった。そのこともあって、メンバーの気が緩んでしまったところがある。特に一本の長さがいつもの山行より長めになってしまったことが挙げられるだろう。また、各々の体力不足も目立ち。1か月ほど山に行かなかったことも起因していると考えられる。下界でもっと体力をつけていきたい。アイゼンのつけ外しが多かったがそのこともあり、統一性がなかった。というのも誰かはアイゼンをつけているがつけていない人もあった。足並みがそろわないこともあった。上級生として、今後1年に指示をしなければならぬ場面が多くなることは明らかであり、しっかりとアイゼンをつける所と

つけない所の見極めをし、的確に指示ができるようにしていきたい。山行の中での一番の反省として、北横岳のピストン時にアイゼンを履かずに行ったことだ。ヒヤリハットといってもいい。非常に滑りやすい状態であったため、アイゼン履かずに行くこと危険だった。こういった、先読みの甘さがまだまだあるのだと感じた。今回私がリーダーとして隊を引き連れる形となったが、まだまだリーダーシップを取れていなかったと感じる。今後、1年を引き連れて山に行くことは多くなっていくだろう。そのためにも、リーダーシップをより発揮していきたい。最後にこの会2で1年を共に過ごしていきたい。それぞれ癖があり、難しいやつばかりだ。しかし、時には頼れ、信頼できる仲間である。今の会2がもっと活性化するためにも、お互いが真剣に言い合えるようになっていきたい。まだまだ問題は山済みなのかもしれないが、この1年、仲間を信頼し邁進して行きたい。

文責：藪内

◎5月

北ア GW 黒部源流部(神岡入山隊)

日程：2016年4月29日～5月3日

メンバー：L 塩谷晃司(会4) 植野侃太郎 山下耕平(会3) 前田達樹 藪内鷹佑(会2)

行程：飛越トンネル～北ノ俣岳～黒部五郎岳～鷲羽岳～水晶岳～竹村新道～七倉

行動記録：

4月29日(1日目)

厳冬期の偵察。これが、本山行の主たる目的だ。大町と神岡から黒部源流部にそれぞれ入山し、途中でスイッチするという計

画である。早朝大町隊と車を交換して、岐阜・富山県境の飛越トンネルへ向かう。飛越新道は 1700m 付近より下に残雪はなかった。幅の広く、走向の変化も多い尾根なので下降で使用する場合は注意されたい。北ノ俣の避難小屋はこの時期であれば水場が使用できる。

4月30日(2日目)

朝から晴天であるが、この時期にしては気温が低い。北ノ俣岳の登りは幅の広い尾根であるが、多少のガスでも登りなら問題ないと思う。稜線は風が強く、テン場の選定には神経を使うだろう。黒部五郎の登りで、ペースをあげて後輩を引き離した。これは、彼らの体力レベルを確認し、危機感を持ってもらうためであった。三俣まで行くことも考えられたが、この日は黒五の冬期小屋を使用させていただいた。

5月1日(3日目)

5:25 T.S 発~7:10 三俣蓮華岳~8:00 三俣山荘

完全にホワイトアウトだが、風はそれほど強くなく気温も高かった。ルーファイには不安はなかったので、行動することにする。二年生に先頭をさせるが、話にならない。コンパスワークもそうであるが、尾根線など現場で収集できるすべての情報を活用できていないと感じた。三俣山荘への下りは途中から山荘にコンパスを合わせて下ったが、これは遠回りでも信州側に張り出した尾根から辿るべきだった。コンパスだけが頼りの「宇宙遊泳」状態だったが、1発で山荘を発見。だが、地形的要因もあるのかこの付近は非常に風が強く、テントを設営するにも一苦労だった。テントポールの予備を持参することや、迅速かつテント

の強度を最大限発揮できる設営力が、当然ながら重要になろう。

5月2日(4日目)

4:45 T.S 発~6:00 鷲羽岳~7:30 水晶小屋~8:35 水晶岳~10:35-11:15 東沢乗越~13:20 南真砂岳~14:45 湯俣岳~17:10 湯俣

翌日から天候が荒れる予報であったため、安全圏まで下っておきたい。鷲羽の山頂で、大町入山の隊を発見し、彼らとはワリモ岳付近で会うことができた。山で身内に会うのは非常に楽しい。情報交換をして、お互いの健闘を祈る。

水晶岳のピストンは特に問題はなかったが、冬は強風や巨大な雪庇がハザードとなるだろう。東沢乗越周辺の岩場は、東沢谷側に巻いた。この日は気温が高く、行動時間が長くなることが予測されたため、途中水作りをした。気温の変化が激しい春山は、晴れば暑いということは想定できたはずで、この時間は無駄であった。

竹村新道は南側が崩壊しており、北から崩壊地を巻くことが多かった。湯俣岳から2000m 付近までは、ルーファイに気を遣った。ここは、塩谷が積極的に口を出す場面が多かった。下部はかなり傾斜があり、冬期は苦勞することが予想される。結局、湯俣まで下ったが、体力面でかなり不安を感じた。テン場についてからの行動も鈍重なものであったので、疲れていても動けるSAC会員であってほしい。

5月3日(5日目)

6:15 T.S 発~7:05 名無避難小屋~8:25 高瀬ダム~9:40 七倉

もうあとは消火試合。小走りで林道をゆき天候が崩れる前に七倉に下山した。

本山行を終えて今思うのは、冬にこの山域に入るのはかなり厳しいということ。そんなことは初めからわかっていたが、より具体的にイメージを膨らませることができた。無尽蔵の体力、確実なルーフアイ力、気象を読み解く力、そしてどんな状況にも屈しない精神力。どれをとってもまだまだ足りない。個人として、組織としてもっと鍛え上げていかねばと、切迫した思いを抱いている。

それでも行きたいと思えるような魅力的な山々である。そのことを再認識した。

北ア GW 黒部源流部(ブナ立尾根隊)

日程：4/29-5/3

メンバー：蒲澤・大槻・渡部・小山

4/29

6:00 七倉山荘

7:30 ブナ立て尾根登山口

10:30 2208m

12:30 烏帽子小屋

4/30

4:00 起床

5:10 出発

6:30 三ツ岳

8:00 野口五郎岳

10:00 東沢乗越

11:00 水晶小屋

12:30 水晶岳

13:20 水晶小屋

5/1 沈殿

5/2

4:00 起床

5:50 出発

6:40 東進隊とすれ違う

7:20 鷲羽岳

8:15 三俣山荘

9:00 三俣蓮華岳

10:00 黒部五郎小屋

12:00 黒部五郎岳

14:00 北ノ俣岳

14:50 テンバ

5/3

4:00 起床

5:00 出発

冬合宿の偵察を兼ねてブナ立尾根から入山した。ブナ立尾根は取付きこそ急で危険箇所もあるが、一度上がってしまえば適度にテンバ適地もあるので大人数でも行けそう。今回の山行ではGWとは思えない程荒れる日もあり、ある意味いい冬の偵察になった。自分たちは3日目、水晶小屋付近で停滞したが物凄い風だった。また少しでも吹き溜まりになるところでは何度も雪かきしないとまらない程だった。冬合宿で行くならばもっと標高の低いところで停滞し、好条件の日に山頂を狙うべきだろう。どちらにしても冬合宿に向け、各員が体力・技術・精神を磨かなければならない。

北ア GW 雄山東尾根 (敗退)

日程 5/4

行程 黒部平駅～東尾根取り付き～2681ピーク (下山開始)～往路下山～黒部平駅
メンバー L加藤徳高(会4)、城田曜子(会

3)、村上有理、山口耕平 (会 2)

行動記録

5/4 (水)

07:30 黒部平駅

12:00 2681 ピーク

13:50 黒部平駅

本山行は当初黒部丸山中央山稜を計画していたが低気圧の接近により悪天が予想されたので代案としていた雄山東尾根報に取り付いた。どれほど悪い天気かと心配しながら黒部平駅まで来たが思いのほか風もなく晴れていた。取り付きは駅の真裏の藪尾根に入っていく。自分は一昨年と同じ時期に東尾根に来たことがあったが今年はやはり雪が少なく作業道が出ていた。中途半端に顔を出した枝や笹が邪魔すぎる。今年は小雪の影響もあるがもう少し早い時期がベストだと思う。藪を抜けてみると風が強くなり 2681 ピークに着くころには歩いていられないほどの風になってしまった。早々に敗退を決め往路下山とした。

もう少し粘ったり上手く日程を使えたのではないかと後味の悪い山行にしてしまった。このゴールデンウィークは自分達の他に 2 隊が北アルプスの奥地を縦走していたわけで、それらと比べると自分も含めうちの隊のメンバーには経験の場を奪ってしまったなど反省が残った。

◎6 月

北ア 明神主稜

日程 : 2016.6.18~19

メンバー : L 城田、植野、渡部(会 3)、前田(会 2)

1 日目

6:15 上高地

6:55 7 番標識

10:25 5 峰台地

11:10 五峰

11:30 五・四コル

12:13 四峰

12:15 三・四コル(T.S)

天気は快晴、絶好のバリエーション日和である。お馴染みの 7 番標識まで汗ばむ暑さだ。南西尾根は確かに両脇が切れ落ちている箇所があるが、丁寧に進めば問題なし。ところどころ上高地が眼下に見下ろせて気持ちが良い。当初は五峰台地をテン場とする予定があったが、時間もあったため、少し歩みを進めることにした。ちなみに五峰台地はかなり広々としており、場所を選ばなくともテントが張れそうだ。五峰・四峰の登りは、ルーフアイは特に問題ない。我々は三・四コルの岩陰を整地し、少し早いが今宵の宿とした。

2 日目

4:40 出発

5:05 二峰

5:40 二・三コル

6:18 主峰

7:30 奥明神沢コル

8:25 前穂山頂

11:00 岳沢小屋

12:45 河童橋

3:30 起床。この日はどうやら天気が下り坂のようで、早めに核心部を通過したい。三峰は岳沢側を巻きぎみに進む。二峰に立つと、少し奥へ行けば懸垂支点がある。よく記録ではここから 2P の懸垂とあるため、下を覗くと 2P 目の懸垂支点が見える。我々も懸垂を 2 回繰り返し、一・二のコルへと降

り立つ。60mザイルを2本持っていたため、繋げて1Pで下りられたような気もするが、ザイルの流れが心配なところだ。一峰もやはり気持ち岳沢側に進むと良いだろう。一峰の下りはクライムダウンで慎重に下る。大きくそびえる前穂高を目指し、最後の登りを経てフィニッシュ。だんだんと雲行きが怪しくなってきた。さて、本降りになる前に上高地へ戻ろう。

北ア 剣岳北方稜線(赤谷山敗退)

2016/6/25~26

会 3) L大槻 山下

6/25

3:30 松本発 6:30 馬場島 7:00 発 9:30 戸倉谷
出合 12:00 ブナクラ峠 13:20 赤谷山

6/26

4:30 起床(雨ガスにより待機)7:00 往路下山
開始 10:20 馬場島

6/25

馬場島を出発し、林道を進み登山道へ入る。ブナクラ谷はエリアでは点線扱いだ、やや藪に覆われかけているもののその下の踏み跡は明瞭である。戸倉谷は水量が多く飛び石伝いの渡渉となった。初めは地図をあまり見ておらず、戸倉谷を過ぎてから水を汲みに戻り30分ほどロスをした。戸倉谷以降は水場はないので確実に汲む必要がある。ブナクラ峠は猫又方面、赤谷山方面どちらへも明瞭な踏み跡が続いていた。また小黒部谷の詰めと思われる踏み跡もあった。小黒部谷は上部に雪渓が残っているが下のほうは水流が見えていた。赤谷山への登りでは稜線上の3か所に雪渓(20m×2、50m×1)があり、登りはツボ足、下りはアイゼ

ンを装着した。稜上でも水がどぼどぼ出ているところがあった。富山平野側が崩壊しているところもあったが巻き道があり特に問題はなかった。赤谷山山頂にはほぼ雪はなかったが、そこから白萩山方面への下りはまだ雪に覆われていた。一瞬のみであったが剣岳へと続く稜線と後立山連峰を見ることができた。

6/26

朝から雨とガスで視界がほぼなく、2時間程度の待機も空しく天候が回復しなかったため往路下山した。今年は少雪であったが、例年ならばもっと稜上に雪があったかもしれない。中仙人谷のエスケープも時期を考えば微妙なところであり、やはり5月の残雪が十分にある時期か8~9月が適期である。赤谷山以降の様子を見た分には今回は天候さえ良ければ2日で抜けられていたと思う。

北ア 蝶ヶ岳~常念岳

2016年6月25日~26日

メンバー:

(会2) L前田達樹 山口耕平

(会1) 佐藤優 江川夏

(1日目)

松本駅 5:58

一日市場駅 6:11

駐車場 7:15

冷沢登山口 8:05

鍋冠山 9:28

大滝山分岐 11:39

大滝北峰 11:53

蝶ヶ岳ヒュッテ 13:05

初日は松本駅から一日市場駅まで電車で行

き、一日市場駅から三郷スカイライン駐車場までタクシーで行く。天気は雨が降ったり止んだり。まずは鍋冠林道を歩くが、その途中で子連れ熊が 10m ほど前を横切った。もう少しで鉢合わせするところで、非常に危うかった。冷沢登山口の登山ノートにコメントを記し、登山開始。この時あたりから、徐々に晴れてきた。1 時間ちょっとで鍋冠山に着き、その後はなだらかな八丁ダルミを進む。ここまでは樹林帯だが、大滝山分岐手前で樹林は開けて、ハイマツが現われてくる。分岐からはものの数分で大滝山北峰につく。南峰へは行かず引き返し、ヒュッテまでの稜を進む。稜上では西からの風が非常に強く、多少振られるほどであった。ヒュッテにつく頃には雨も降り出していた。ヒュッテにつきテントを立てようとしたが、稜上で風をもろに受け、テントはひん曲がり、全く立てられる状況ではなかった。それでも格闘するも叶わず、一時小屋の中に退避する。その後、なんとか風の弱そうなところを探し出し、ようやくテント設営に成功。だがそれでも、浸水の恐れがあるため再び場所替え。ハイマツ帯の隙間に立て直し、ようやく落ち着いた。

(2 日目)

ヒュッテ 4:00 起 6:00 発

2592 手前 7:08

常念岳 9:35

常念小屋 10:39

笠原橋 12:04

一ノ沢 13:28

この日は朝から雨が降っていた。蝶が岳山頂にはすぐ着いたが、展望は無し。写真を数枚とって、先に進む。蝶槍からは、樹林

帯となり、小さなピークをいくつか超える。2592 を過ぎたあたりから樹林はなくなり、さらには晴れ間も見えだしてきて、常念岳や向かいの峰々を望めた。虹も見え、非常に清々しい光景であった。常念岳まで約 350m アップして、ようやく頂上へたどり着く。そこからはある程度の展望があった。常念小屋では、理学部地球学コースが実習をやっていたらしく、安坂に会うことができた。なんとという偶然。常念小屋で帰りのタクシーを呼んだあと、一ノ沢に向けて出発。なお、この区間に雪渓はほとんど見られなかった。例年は雪渓もっとあるらしいが…。木製階段や沢状の道、橋をいくつか渡ったりして、一ノ沢に下山した。

今回の山行では行動面では順調に通すことができた。生活面では、テント設営等で苦戦を強いられたが、悪条件下でいい経験になったのではないかと思う。一年生にとっては初めての個人山行で、体力面、生活面でまだまだ至らないところもあるが、それらは今後の山行を重ねることで、スキルアップしていこう。

北ア 表銀座

日程：6/25~26

メンバー：村上(L)、小山、高井

6/25

5:50 中房温泉

8:30 合戦小屋

9:20 燕山荘

9:50 燕岳

10:20 燕山荘

13:30 大天井ヒュッテ

15:30 西岳ヒュッテ

6/26

4:00 起床

5:10 発

6:30 水俣乗越

7:30 ババ平

11:10 上高地

金曜日に穂高駅裏の老舗旅館東屋に前泊した。翌朝、東屋から穂高駅に移動中に高井が転倒。前歯を折る重傷を負った。一瞬山行中止が頭をよぎったが、とりあえず行けるところまで行く方針でタクシーに乗り込み、中房温泉に向かった。

中房温泉で高井に鎮痛剤を飲ませ、出発する。合戦尾根は急と聞いていたが、地形図通り、予想を裏切るほど急ではなかった。

大天井岳は登らず北側を巻いて大天井ヒュッテに行った。ここで雨が降り始めた。合羽を着て2ピッチ歩き、西岳ヒュッテのテンバに到着。歯が痛い中、高井はよく頑張ったと思う。

翌日、天気は悪化傾向。2:30に一度起床するがガスと風があり、水俣乗越から下山することを決め二度寝。

水俣乗越まではもろい岩場の通過やハシゴが連続し、一年生を連れているとやや緊張する。

ババ平に降りた後は数週間前に歩いた道をひたすら歩いて上高地へ。

今回は一年生の初めての週末山行で直前にけがをするハプニングもあり、進退の判断が難しかった。その中でも一日目に西岳ヒュッテまでの長時間行動をこなせたのはよかったと思う。

◎7月

北ア 榎海新道

日程：2016年7月16日～18日

メンバー：

(会2) L 前田達樹 小山悠太

(会1) 江川夏 高井野乃子

(0日目) 前泊

小蓮華温泉 22:00 頃着

まず電車で松本駅から南小谷駅まで行く。

そこから蓮華温泉までタクシーで行く。

12600円とそれなりに遠い。蓮華温泉では携帯電話の電波が通じないためここでメール報告する。蓮華温泉に着いたときには雨が降っていたから屋根のある所にテントを張り就寝。

(1日目)

小蓮華温泉 4:00 起 4:40 発

白馬大池 7:40

小蓮華山 9:07

三国峠 9:53

鉢ヶ岳トラバース前

10:26

雪倉岳 11:33

朝日岳分岐 13:45

朝日小屋 15:27

蓮華温泉小屋の方に電話を借り、昨日できなかった現役留守に連絡する。そうして登山開始。白馬大池までは、つづら折りを繰り返しながら樹林帯を登っていく。白馬大池に出ると、草原となり、一気に開ける。この日はずっと晴れていて、快適爽快な稜線歩きであった。小蓮華山からはすぐに三国境へ着き、ここから海まで北上する。人

は一気に少なくなる。鉢ヶ岳はトラバースし、雪倉岳をジグザグに登る。雪倉岳からの眺めも抜群であった。雪倉岳からの下りは多少悪いガレやトラバースを通過し、コルとなる。そこでは水が流れていた。木道を歩き、水平道分岐から水平道に入る。この道は残雪状況によっては通行不能だが、実際雪はほとんど残ってなく、1～2週間前から通行可能であった。水平道とはいうものの、大きなアップダウンがあり、水平という名はふさわしくないのではと思う。少し崩れている場所もある。さらにはこの時は無風快晴で標高もあまり高くなく、暑い中の行動を強いられた。水谷のコルから朝日小屋へ。

〈2日目〉

朝日小屋 3:00 起 4:00 発

朝日岳 4:45

サワガニ水場 9:15

北ノ俣水場 9:55

犬ヶ岳 11:00

梅海山荘 11:10

この日は前日の天気とは一変、ずっと雨が降り続いていた(行動している午前中)。朝日岳では展望は全くなく、一面ガスで覆われていた。そこからの下りでは、登山道右側に雪渓が残っていた。長梅山の手前では長い木道を歩く。長梅山は非常に平坦であった。長梅山の後、一か所、下りの登山道に雪が残っている箇所があった。雪は固く、通行に少々危険が見られた。ピッケルを持ってなく、また、残雪状況を把握できていなかったのはリーダーとしての反省点である。アヤメ平や黒岩平のあたりでは湿地・草原となっていたが、大雨で道がぬかるん

でいたり溝状の登山道に水が流れていたり、靴の中に水が浸水するのをもはや避けられなかった。また、木道は雨で滑りやすいため注意が必要であった。中俣新道との分岐を左に進み、ササの茂る稜上を進んだ。このあたりで、サワガニ登山会の方々が、ササの刈り取り・登山道整備を行っていた。ありがたい。サワガニの水場、北ノ俣水場とも、この日は雨が降っていたからであろう、しっかり出ていた。犬ヶ岳手前は、非常に細い尾根となっていて、そこを注意して進み、少し下れば、すぐに梅海山荘である。

〈3日目〉

梅海山荘 3:00 起 4:02 発

オーレン山 4:53

オーレン水場 5:27

白鳥山 7:30

シキ割り水場 8:35

坂田峠 9:30

二本松 10:54

親不知 12:17

海岸 12:30

この日は海の日である。だから海へ行く。粋な山行プランである。オーレン山、菊石山、下駒岳、白鳥山と、アップダウンをいくつも繰り返しながら進んでいく。といっても、大部分は下りである。梅海山荘から海まで約1600mダウンである。下駒岳手前では、木の根と露岩、ロープのかかった急登が続いた。シキ割り水場では、十分に水が出ていた。金時坂では、非常に急な下りが続く。普通ならつづら折るような傾斜をまっすぐ下っていく。三大急登よりも断然

急、だと思う。坂田峠でいったん車道を横切り、再び登山道に入る。そうして樹林帯低山を進み、最後の山入道山を登って下れば国道に出る。国道を横切り親不知観光ホテルのわきにザックをデポ、階段を下りようやく海に出た。天気は曇りで白々していたが、海まで踏破したのは感慨深い。

今回の山行では、7月中旬で、標高の低いルートなので、暑くなることが予想されたが、実際の天候は雨、霧、曇りと、暑さはあまり気にならずに歩くことができた。

一年生は、多少弱音を吐くこともあったが、悪天候の中、よく歩いてくれたと思う。反省点として、下りでの疲れ・歩き方やテント内での物の把握、朝の遅さなどが出ていたが、それらを解消しつつ、今後夏縦走等の山行に挑んでもらいたい。

北ア 小倉谷→打込谷下降

日程：2016年7月16日~18日

メンバー：L 塩谷晃司 内田祥平 蒲澤翔(会4)

行程：金木戸川第一ゲート~小倉谷~笠ヶ岳山荘~打込谷~金木戸川第一ゲート

行動記録：

7月16日(1日目)

6:45 第一ゲート~7:20 第二ゲート~8:20 発電所~9:30-10:00 小倉谷出合~14:20 大ゴルジュ帯入口~16:30 大ゴルジュ帯出口 (B.P)

新穂高に一台車をデポし、第一ゲートへ。黙々と林道を行き、双六谷を徒渉して小倉谷へ入渓する。エメラルドグリーンの美しい溪相に見とれるが、水量は多く油断はできない。ロープを出して徒渉する。ミニゴルジュ帯は微妙なチョックストーンの乗越

などがあったが、スムーズに突破できた。大ゴルジュ帯手前でもビバーク適地があるが、翌日の天候が不安なので、この日のうちに越える判断をした。3mCSの15m淵は、塩谷が左壁をへつる。ロープが沈んで後続にうまく届かなかったので、ウレタンマットをロープでくくって流し、後続をビレイした。出口付近の残置スリングのある滝も、塩谷が先に登攀して、後続を確保したが意思の疎通がうまくいかなかった。事前に方針を伝えておくことが必要であった。

7月17日(2日目)

7:30 B.P~8:00 40m大滝~9:00 二俣~11:00 奥ノ二俣~13:30-14:15 笠ヶ岳山荘~16:30 打込谷二俣(B.P)

朝から雨。小倉谷中流部は大きな滝の高巻きが多かった印象。滝によっては巻道がしっかりしていて、それなりの入渓者がいることを実感した。二俣で右俣に入るが、出合の滝は登攀できないので、左俣の滝を高巻いたのち尾根を越えて右俣に入る。残り300mほどで水が涸れ、歩きにくいゴロとなる。最後は笠ヶ岳のトラバース道をたどり、笠ヶ岳山荘へ。雨と霧で山頂に行くモチベーションはなく、温かい山荘で予報を確認、晴れることを知る。弱い自分たちは笠新道の誘惑に駆られるが、エスケープする理由はなく山荘とテンバの間より、北面の打込谷へと下降を始めた。上部はゴロ、水流が出てからはナメ滝のクライムダウン、一ヶ所懸垂をして二股を幕場とする。

7月18日(3日目)

7:10 B.P~10:30 仙ヶ淵~11:55 双六谷出合~14:55 広河原~17:30 第一ゲート

ツェルト&シュラフカバーでの一夜はひ

どく寒かった。だが、この日は快晴。明るく開けた谷を気持ちよく下っていく。中流部のゴルジュ帯は高巻きからの懸垂で、問題なく下降できた。下流部は状況を確認してから、淵へのドボンと流れるプールを楽しみつつ出合まで。双六本谷は水量多く、徒渉にロープを使った。壊れたつり橋から、軌道跡の登山道をたどるが、ここが辛かった。最初はトゲ地獄にやられ、その後も崩壊して不明瞭な道でまったく気が抜けない。広河原について一安心、足の痛みを気にしつつ、それと確かな充実感をもって、13kmの林道をゲートまで戻った。

北ア 槍ヶ岳北鎌尾根

日程：2016/7/16~18

メンバー：L 植野 渡部 藪内 山口

行程 7/16 6:20 河童橋
8:30 横尾
10:50 槍沢ロッジ
12:10 水俣乗越
14:05 北鎌沢出合
7/17 4:15 出発
6:15 北鎌のコル
7/18 4:30 出発
5:35 独標のコル
7:00 独標
10:20 北鎌平
11:30 槍ヶ岳
14:30 大曲
18:30 上高地

今回は三日目に好天に恵まれ、行程を通しきることができた。一日目は行程通り、二日目は雨のため北鎌のコルでテントを張った。場所を間違い、とても窮屈だった。

コルに出る直前で左に行ってしまったが、右へ登らなければいけなかった。夕方には晴れ、夜は星が綺麗であった。三日目は快晴。皆、喜んで出発した。独標はコルから下にトラバースした後、上に行こうとしたが、岩が非常に脆いところに突っ込み過ぎてしまい危なかった。

稜上をもう少し上がったのちトラバースした方が良いと感じた。

また、北鎌平手前で稜上とトラバースでルーファイをしている際に山口の起こした落石が危うく藪内を直撃するところだった。これは双方に非があった。落石は起こしてはならない。また、万が一起きた場合被害が及ばない位置取りを心掛けることが大切である。

穂先は山頂直下のチョックストーンのあるチムニーまで左から登り、チムニーの下をトラバース後、中央から穂先に出た。登山者の歓声を受けて山頂に立った。その後、上高地まで下山した。

北ア 白馬岳～唐松岳

日時：7/24、7/25

メンバー：L 山口耕平(会2) 前田 達樹(会2) 江川 夏(会1) 佐藤 優(会1) 高井野乃子(会1)

行動記録：7/24 6:50 猿倉荘発 7:40 白馬尻 11:25 白馬岳頂上宿舎 11:55 白馬岳
1:40 杓子岳 2:50 白馬鑓ヶ岳 3:30 天狗山荘

早朝に松本を出、夜行列車とバスで猿倉層へ行く。この日はすごい人であり、白馬尻までは行列の一部となって歩くことになった。大雪渓では全員持参していたアイゼン

を装着。一年生にはSACに入って初めてのアイゼン歩行となった。今年の大雪渓は既に秋道が出ていた。白馬三山の稜線は雲海が広がっており、雄大な景色を楽しみつつ歩いた。

7/25 3:30 起床 4:40 天狗山荘発 5:26 天狗の大下り 7:20 不帰一峰 8:20 不帰二峰北峰 9:25 唐松岳 12:40 八方尾根小屋 1:00 黒菱第三リフト着

日の出前に起床し、雲海からのご来光を背に出発。天狗の大下りは中々に悪く、一年生の通行には緊張を要した。不帰嶮は落石に注意しつつ慎重に通過した。唐松岳からの下りではかなりの人数とすれ違い、八方尾根小屋の近くではまたも行列の一部となった。一年生は全体を通じて疲れを見せる場面が多かったが、それでも雲海や岩峰を楽しんでいた。

北ア 劔岳登攀

日程：2016年7月27日~30日

メンバー：L 塩谷晃司 蒲澤翔(会4)

行程：黒部ダム~ハシゴ谷乗越~真砂沢ロッジ~三ノ窓~チンネ、劔尾根登攀~三ノ窓雪渓~ハシゴ谷乗越~黒部ダム

行動記録：

7月27日(1日目)：入山

7:50 黒部ダム~8:40 内蔵助谷出合~10:10 内蔵助平~11:30 ハシゴ谷乗越~13:20 真砂沢ロッジ

テスト前ということで、暇人2人で劔岳に登りに行った。夏合宿の偵察も兼ねて。雨天により入山を一日遅らせる。ハシゴ谷乗越までの道のりは相変わらず悪い。一年生を歩荷させて通過させるには、相当の注意を払う必要があることを再認識した。藪

が濃く、汗と水分で全身びしょ濡れになり、不快感はマックスだ。それでも黙々と歩く。

ハシゴ谷から劔は見えず、朽ちたハシゴを下って劔沢まで。そこで、異変に気付く。雪渓が全くない！崩壊地を下り偵察をして、太ももくらいの徒渉で越えた。ここまで残雪がないとは・・・。大変な合宿になりそう。ずぶ濡れなので真砂沢で本日は終了しよう。

7月28日(2日目)：チンネ左稜線

4:30 真砂沢ロッジ~5:20 長次郎谷出合~6:40 熊ノ岩~7:25 池ノ谷乗越~8:20 三ノ窓~9:10 チンネ左稜線取付~12:20 T5~15:20 チンネの頭~16:00 池ノ谷乗越

例年、8月後半はロッジから一度雪渓に乗り、ナムの滝を巻いて雪渓に乗るが、今年は長次郎出合まで、左岸の雪渓際を歩いた。長次郎谷の下部は比較的安定していた。I・II峰間ルンゼ付近は例年より下部から右岸スラブに移り、より上部で雪渓に戻った。池ノ谷乗越からの池ノ谷ガリーは、浮石の堆積したガレ沢だが、それほど悪い印象を受けなかった。三ノ窓にはスムーズに到達でき、本日はチンネ左稜線へ。1p目は蒲澤で、それからはツルベで登った。岩はそれなりに硬いが、部分的にもろいところもある。核心T5は強烈な高度感に臆さず、ガバをとって冷静に登れば問題ない。支点も取れる。チンネの頭からは、懸垂なしで池ノ谷ガリーに下れた。全11p、非常に快適なルートだった。

7月29日(3日目)：劔尾根上半部

5:00 三ノ窓~6:10 池ノ谷撤退開始~7:00 R2 付近取付~8:30 コルBより登攀開始~10:00 劔尾根ノ頭~11:30 長次郎ノ頭

~12:30 三ノ窓

本日は劔尾根へ。池ノ谷ガリーをさらに下っていくが、雪溪の状態が悪く、R10からの下半部を含めた登攀を断念する。そこで、池ノ谷尾根との間の谷に入り、R2よりコルBを目指した。しかし、ここもまた雪溪の状態が悪く、少し手前の草付きの緩斜面帯よりコルB付近に出た。ここから2pで劔尾根の頭へ。途中かなり脆いところがあった。ここからコンテで行ったが、不要と判断し解除。長次郎ノ頭手前の脆いリッジ少々緊張した。

7月30日(4日目): 下山

5:30 三の窓~7:20 二股~8:30 徒渉終了
~9:20 ハシゴ谷乗越~10:30 内蔵助平
~11:35 内蔵助谷出合~12:30 黒部ダム

チンネ中央チムニーを登ろうとしたが、天気も微妙なので下山することに。三ノ窓のノドの部分は通過できず、左岸より巻いた。例年なら二股付近までつながっている雪溪もかなり手前で途切れ、徒渉の連続だったが、靴を濡らすことなく徒渉できた。懸案の劔沢の徒渉は例年ハシゴ谷乗越への橋がかかるあたりで渡った。こちらは入山の際のポイントより水量が少なく、膝上くらいで徒渉できた。あとは、黒部ダムまで黙々と歩いた。

今年の劔の状態や概念を把握できたことはよかったと思う。一筋縄では行かない合宿になりそうだが、最善を尽くしたい。登攀の反省としては、ロープの流れ、スピードに関する意識をもってやれば、さらに改善すると感じた。

中ア 中御所谷西横川

日程: 7/1

メンバー: 蒲澤・村上・山口

6:00 菅の台 BT

8:00 入溪

8:10 東横川出合

9:15 30m 滝

10:15 奥の二俣

12:00 長谷部新道

13:00 千畳敷

13:30 中御所谷登山道

15:30 しらび平

16:15 菅の台 BT

沢の経験の浅い2年生を連れて行く目的で、駒ヶ岳ロープウェイの隣を流れる西横川を遡行した。二人とも沢初心者だったので、少し多めにロープを出すことを意識して登った。二人とも体力や歩きはまずまずだったが、沢靴でのスメアリングや出し入れの激しいロープワークには慣れが必要だと感じた。東横川出合を過ぎて少し登ったあたりで、スノーブリッチがあり、雪溪の下をくぐって通過した。今年は雪解けが早いので、平年並みであればこの時期の遡行は厳しいかもしれない。11:30頃に長谷部新道に到着したが、目印を見落としておりそのまま遡行を続けてしまい、30分ほど迷って長谷部新道に合流した。長谷部新道は道が細く、アザミが生えていて歩きにくかった。千畳敷からしらび平への下降は廃道になった登山道を通った。ロープウェイの整備で使われているのか踏み跡はあったが、急斜面とアザミに苦勞して下降した。西横川は経験者ならロープを出さずに登れるが、初

心者を連れていくなら大滝等の要所要所でロープを出した方がいい。アプローチがよくロープウェイを使えば下降も楽なので、近くの中御所谷本谷や東横川、宝剣岳中央稜などと合わせて登ると楽しそうだ。

中ア 中御所谷本谷

日程：7/10

メンバー：蒲澤・内田・塩谷・小山

7:45 しらび平

8:00-8:45 日暮の滝

9:30 宝剣の滝

10:30 10mCS

11:00-11:30 三段トイ状の滝高巻き

11:45-12:15 40m 滝 2 本の高巻き

12:30 鏡の滝

13:00 千畳敷

14:00 しらび平

先週に引き続き中御所谷を遡行した。本来は宝剣岳中央稜と併せて登る予定であったが、天候が悪く中御所谷遡行のみになってしまった。梅雨のため水量が多く、秋ならば水のないところも水流があり、滝の登攀ではホールド探しに苦勞した。日暮の滝は1p目を左岸のルンゼから、2p目を右壁から登った。宝剣の滝は水流右のスラブから水流上に抜けるように通過した。水流内のホールドを探す箇所もあった。10mCSは右壁から取付き草付をトラバースして高巻いた。40m滝は左岸下流の支沢を登り、草付をトラバースして一旦滝の中を渡り、2本の滝の中央のブッシュ帯を登って高巻いた。その後はロープを出さずに登ることが出来

た。中御所谷本谷は遡行距離は短い、その中に滝が多く存在し、ほとんど歩きのない沢だった。高巻きの必要な滝も多く、その高巻き自体もなかなか難しかった。出来る限り沢から離れないように高巻くとうまく高巻きできると思う。泳ぎはないが短いルートに沢の要素が凝縮されたいい沢だった。

南ア 北岳バットレス

日程：2016年7月23日~24日

メンバー：L塩谷晃司(会4) 村上友理(会2)

行程：広河原~白根御池~第四尾根主稜~北岳~白根御池~広河原

行動記録：

7月23日(1日目)

10:40 広河原~12:20 白根御池

この日は白根御池まで。特に何もなかったが、村上がぼてていた。一応視界に入る位置をキープしつつゆっくり登った。頑張れ。偵察に行くつもりだったが、取付はわかる自信があったので行かなかった。

7月24日(2日目)

2:30 白根御池~4:10 下部岩壁取付~7:30 四尾根取付テラス~10:30 トップアウト~11:00 北岳山頂~12:20 白根御池~13:45 広河原

2:00に起床。こんな時間にエッセンしても胃に負担がかかると思い、お茶をすすって、アルファ米にお湯を注ぎ出発。取付で食した。大岩のあるバットレス沢、水流のあるC沢を確認、そこから20m先のD沢をちょっと詰め、CD中間尾根に入る。踏み跡明瞭。下部岩壁は、第五尾根支稜から取付く。1p目まではヘッドンをつけて登った。2pで開けたところに出て、もう1pル

ンゼを登ると横断バンド。崩落していて不安定なところもあるのでロープは出したままにした。第4尾根下部のブッシュ交じりの尾根から取付いたが、意外と登攀距離もあり、ここで時間を食った印象がある。あまり快適でもないのに、C 沢にまわりこんでヒドゥンスラブから取付テラスを目指した方がよいのかもしれない。

テラスからは概ね快適なリッジ登攀が続く、終了点まで計 7p。手ごたえのある所は 3 か所で、1p 目のつるりとしたクラック、3p 目の三角形の垂壁、最後の城塞ハング。どれもプロテクションはしっかりとれるので、落ち着いて登れば問題ない。基本的には塩谷がリードしたが、簡単なピッチを村上にもリードさせた。登りも安定していたし、よい経験になったと思う。

マッチ箱の懸垂は手前の支点を使用したのが、奥の支点を使用したほうが良かったように思う。ただ、後者は振られに注意する必要がある。枯れ木テラスは噂通り枯れ木しかなく、その後のトラバースはひやひやだった。最後に核心、城塞ハングというザックが邪魔なチムニーを越え登攀終了し、15 分くらいで山頂につく。そこから激下りの 2p で広河原に下山。

同期と本チャンに行くのとは違い、2 年生がパートナーで実は緊張していたが、お互いよい経験を積むことができた。無思慮にスタカットではなく、状況に応じたロープワークと適格で迅速なルーフファイができれば、もっと効率が良かった。そしてとりあえず村上は体力つけろ。それが今後の基盤となるから。

木曾 岩倉川本谷／柿其川本谷

日程：2016 年 7 月 23 日(土)、24 日(日)

メンバー：山下耕平(会 3) 蒲澤翔(会 4)

小山悠太(会 2) 藪内鷹(会 2)

ルート：岩倉川本谷(樽ヶ沢)、柿其川本谷

記録

岩倉川本谷(樽ヶ沢)

0720 林道ゲート発

0735 樽ヶ沢出合

1100 二俣

1145 奥ノ二俣(間違えに気付く)

1230 奥ノ二俣より引き返す

1455 樽ヶ沢出合

1520 林道ゲート着

報告・反省

1 日目、岩倉川本谷へ行くつもりが、樽ヶ沢を遡行してしまった。本来の入渓点は樽ヶ沢出合にかかる橋から 2~3 分ほど先に行ったところであった。入渓点できちんとコンパスを合わせなかったのが原因である。樽ヶ沢に入っても、事前情報の写真と同一のポイントが出現したりと、特に疑うことをしなかったためにコンパスを使っただけの読図を怠り、結果的に奥ノ二俣まで詰めてしまった。事前情報の信頼度も確かではなかったもので、今回の反省点としては、やはりコンパスを使った正確な読図を怠ってしまったことにあった。

個人的には 7 月 2 週目に木曾駒でやってしまったミスとまったく同様のミスを犯してしまったので、反省を重ねられなかったことが反省である。

樽ヶ沢自体は非常に綺麗で面白い沢であったから、ここを対象としてみるのは面白いと思う。

記録

柿其川本谷

0715 柿其溪谷駐車場発

0720 入溪

0740 牛ヶ滝

1000 霧ヶ滝

1255 伊勢小屋沢先脱溪点

1420 柿其溪谷駐車場

報告

とにかく綺麗。ここはぜひ自分の目で確かめてもらいたいから、詳細は省く。牛ヶ滝、霧ヶ滝は共に巻いた。その他はそれほど難しいというところはなかった。核心はやはり泳ぎとシャワーを浴びながら小滝を登るところだろうか。また、つるつるの岩では、フェルトソールとラバーソールのフリクションの違いで、ザイルを出した個所もあった。

夏の4週目にはオススメの、非常に面白い沢であった。

八ヶ岳 大同心・小同心

日程：7/24

メンバー：L.植野 渡部

行程	7/24	4:40	美濃戸口
		6:50	赤岳鉱泉
		8:00	大同心南稜取り付
き		11:45	大同心の頭
		13:00	硫黄岳
		13:40	赤岳鉱泉
		15:20	美濃戸口

23日が雨の予報だったため、24日ワ

ンデイに変更した。大同心南稜は最高でもⅢ級でそれほど難しいルートでは無かった。しかし、トポから少し外れるだけで浮石だらけで気が抜けなかった。最終ピッチは雲稜ルートと合流してドームを登る。リードは渡部がした。自分はアブミを何度も使ってようやく登れた。その後、頭から稜線に出て硫黄岳経由でエスケープした。理由は最終ピッチを登っている最中にザイルが断裂しかかっているのに気付いたためである。気付いたときには断裂箇所は繰り出された後で渡部をローアダウンするのは危険だったので続行した。南稜ルートに登るときにザイルをほぐした時点では気付かなかった。登攀中に切れた可能性がある。そろそろザイルを新しくするべきかもしれない。

谷川連峰 大源太川北沢本谷

日程：2016年7月16日(土)

メンバー：山下耕平(会3) 大槻泰彦(会3)

村上友理(会2)

ルート：北沢本谷

記録

0640	大源太登山口発
0650	北沢入溪点
0905	三俣
1110	大源太山山頂直下尾根上
1120	大源太山
1320	大源太登山口

報告

本来の入溪点は、北沢を二度目に渡る点であったが、水の流れが心地よさそうであったので、一度目の渡渉点で入溪した。特に難しいところはなかったが、つるつるして

よく滑る岩質であり、戦々恐々としながら歩いた。途中、山下が転倒し、右手の指を突き指してしまった。まだまだ基本的な沢の歩きができていないと反省した。

三俣の大滝は、最上部のみザイルを出して、引き上げを行った。その後もどンドン高度をあげ、最後徐々に左に進路を変えていくと、大源太山直下の尾根上に出る。狙い通りのルート取りであった。

大源太山をピストンし、1ピッチ程で下山。最後、駐車場まであと15分程という平たんな場所で、山下が右足を盛大に捻り、翌日予定していた万太郎を中止することになってしまった。油断大敵。教訓である。

谷川連峰 ナルミズ沢

日程：7/29、7/30

メンバー：L山口耕平(会2) 藪内 鷹佑(会2)

行動記録：

7/29 8:50 宝川温泉車止めゲート発 10:10 入渓点 12:20 大石沢出合T. S
早朝に松本BOXを出発し、車で4時間ほどかけて宝川温泉車止めゲートに着いて入山。トゲ付きの植物が繁茂する林道を抜け、朝日岳登山道の渡渉点から入渓する。エメラルドグリーンの穏やかな水を歩いたり泳いだりして2時間ほどで大石沢出合に到着。斜面の上に広がる草原にテントを張る。大石沢出合には小さな滝があり、落ち口で釣りをする。釣り始めてすぐに藪内が岩魚を釣り上げ、テンションが上がる。その後は二人とも釣果ゼロであったが、一匹釣れただけでも嬉しいものである。岩魚は焚火で焼いて食べた。

7/30 5:00 起床 6:05 出発 7:25 二股

10:15 ジャンクションピーク 11:50 大石沢出合 2:25 宝川温泉車止めゲート着

弱い雨の中出発。しばらく歩くと全長8mほどの魚留滝が出現する。ザイルは不要であると判断した。その先の二股でどちらに進むか悩み、偵察に1時間弱の時間を消費する。読図、ルーファイ能力の不足を痛感した。二股を右に進み、「天国のツメ」と形容されるツメに入る。斜面いっぱい広がる草原の中を快適に詰めていく。天国をしばらく満喫するとヤブ漕ぎ地帯に突入する。汗だくになりながらヤブを漕ぎ、ジャンクションピークから朝日岳登山道を使って大石沢出合に戻る。デポしていた荷物を回収し、再び朝日岳登山道に乗って宝川温泉車止めゲートまで歩く。この日は暑く、大石沢出合からは行きと同じ様に沢を通って帰った方が気持ちが良いかもしれないと感じた。ナルミズ沢は穏やかな自然に溢れた楽しい沢で、遠出してでも行く価値があった。読図、ルーファイの精度を高め、これからもたくさんの沢に挑んでいきたい。

◎8月

北ア縦走

日程：2016/8/5~13

メンバー：村上(L)、藪内、高井

8/5

7:00 発

8:45 二本松

12:34 尻高山

13:30 坂田峠

この日は白鳥小屋まで行く予定だったが、重い荷物と低高度の暑さに高井がダウンし、

思うように距離が進まず、坂田峠までで切ることにした。坂田峠にはほかに車中泊の登山者が1人いた。

8/6

4:20 発

7:35 山姥平

8:25 白鳥小屋

坂田峠での夜は大量の蚊とうだるような暑さでメンバー全員がほぼ一睡もできなかった。この日は二日分の行程を詰めて梅海山荘まで行く予定だったが、行動中に全員が体調を崩し、断念。天気が良いすぎるのが憎らしかった。

8/7

4:00 発

7:45 オーレンの水場

9:00 オーレン山

10:15 梅海山荘

この日の行程はエアリアでは3時間ほどになっているが過去の記録を見ると6時間ほどかかっているのが多くみられる。我々も同じような時間がかかってしまっている。前日までの反省により早出を心掛けた。テンバでは高井がずっと寝ており、とても心配だった。

8/8

3:00 発

4:50 サワガニ山

5:50 黒岩山

9:40 長梅山

10:55 朝日岳

11:35 朝日小屋

この日は全員体調が戻り、比較的順調に歩

けた。依然、上級生も辛い歩荷には変わりがなかったが、一年生の調子が上がると隊の調子も上がる。長梅山のあたりではこれぞ梅海新道という景色を楽しむことができた。

8/9

4:50 出発

8:49 雪倉岳

11:50 白馬岳

12:20 頂上宿舎

朝、ヘッドレン行動で出発しようとしたところガスが濃く、明かりが反射して何も見えない状態だったので少し明るくなってから出発した。この日はこれまでと一転し、ガスと風で稜線上はとても寒かった。この日、担ぎ上げたスイカを食べようと思っていたが、寒さでその気もなくなってしまった。

8/10

5:20 発

7:02 白馬鐘

7:47 天狗山荘

11:30 峰北峰

11:45 峰南峰

12:35 唐松岳

13:17 唐松山荘

この日が技術的な最初の核心、不帰キレット越えだ。高井の団装を極力減らして通過した。怖かったのは2峰の登りで、高井が週末山行で一度行っていてよかったと心から思った。

最後の唐松岳の登りは根性でこなしテンバへ。この日のテンバでは信大OBの方と、村上と同郷のirnac生に出会い、とても楽しかった。スイカも処理し、のちの行程に

英気を養った。

8/11

3:30 発

6:00 五竜山荘

この日は八峰キレット越えの予定だったが、朝から高井の体調が悪く、無理はできない危険地帯だったので五竜までで切ることにした。ほとんど沈殿のこの日は上級生は時間を持って余してしまっていた。

8/12

4:00 発

4:55 五竜岳

7:11 北尾根の頭

8:30 八峰キレット小屋

10:42 鹿島槍南峰

11:50 冷池山荘

高井の体調も好転し、八峰キレットに臨んだ。特に悪いのは下馬評どおりキレット小屋前後で、安定した歩行技術とすれ違いの技術が要求された。鹿島槍からはテンバが埋まることを懸念し村上がテントと少ない団装をもって先行し、場所を確保した。この日はあふれんばかりの混雑だったので、この作戦はよかったと思う。

8/13

4:00 発

5:15 爺ヶ岳

6:00 種池山荘

9:16 柏原新道登山口

朝から村上の胸部の痛みがあったがとりあえず種池山荘まで進む。原因がわからないことや今後の行程を通すことがこの時点で絶望的だったことなどを考え、ここでへ残

することに決めた。

下山までの判断に精神的な弱さが出た。ここで無理をして進まなくとも、もっと他の行動ができたのではないかと思う。最後に自分の弱さが出る、後味の悪い山行になってしまった。高井には来年、これを越える大きな縦走をぜひ完遂してほしい。

南ア縦走

8/5～16

会 2 CL 小山悠太 前田達樹 山口耕平

会 1 江川夏 佐藤優

1 日目

池口岳登山口 5:00ー池口岳 15:30ーテンバ 17:45

2 日目

テンバ 5:10ー加加森山 7:25ー光岳 12:20ー光岳小屋 12:30

3 日目

光岳小屋 3:50ーイザルガ岳 4:10ー易老岳 6:00ー仁田岳 7:55ー茶臼岳 9:10ー上河内岳 11:10ー聖平小屋 13:30

4 日目

聖平小屋 3:40ー聖岳 5:50ー百閒洞山の家 13:15

5 日目

百閒洞山の家 3:15ー赤石小屋 5:30ー荒川小屋 7:45ー中岳 9:30ー悪沢岳 10:10ー前岳 11:40ー高山裏避難小屋 14:00

まずこの 11 日間に及ぶ縦走の前半戦の話をしたと思う。始まりは池口岳である。易老渡の通行止めによりサブプラン発動に近い形で南信濃からタクシーにて池口岳登山口に前泊した。正確には登山口から少し

歩いた避難小屋に前泊した。初日は林道を少し歩いてから登山道に入り登山開始の行程だが、林道から登山道に入る地点を誤り無理やりに合流することに。この時少しふみ跡があるような急な悪い道を通ることになってしまった。当然ながら縦走の重荷を背負っている一年生はとても辛そうでした。辛いせいか佐藤はこの1ピッチ中で二回もうんこをしに森へ消えてしまった。1時間も歩かないうちに登山道に合流し池口岳まではサクサクである。予定では加加森山を超えテンバを探すつもりでいたが行動時間と天候のこともあり池口岳を過ぎてからテンバを探し始める。いい感じに沢が近くにありテントの張れるテンバがあったので行動を打ち切る。

二日目は光岳までである。前情報でヤブ漕ぎやルーファイの困難さが心配されたがそんなことはなく歩けた。途中眼鏡を拾い「あ、眼鏡だ！！サングラスとかだったらもらったのになー、眼鏡はな・・・」という落し物があり盛り上がった。テンバにつきOBの方に差し入れていただいたスイカを食べた。おいしかった。テンバで前田が「眼鏡がない」とかいいだす。そう、途中で拾った眼鏡は先頭を歩いていた前田のものだったのだ。なんてこった。

三日目は上河内岳を超える。とても天気が高く上河内岳から臨む聖や赤石のでかさにビビリ奥歯ガタガタの一年生をしり目に聖平小屋へ。

四日目。ついに聖岳を超える。天候は我々に味方した。百閒洞山の家にて山口と江川は手ぬぐいやTシャツを買ってテンションあがっている、ウホウホ言ってる

五日目。赤石や悪沢の日ということで一

同興奮気味である。皆ウホウホ言いながら赤石や悪沢を超えてゆく。この日も天気が良く楽しい登山ができた。

6日目

高山裏避難小屋 4:10ー板屋岳 4:50ー烏帽子岳 9:20ー三伏峠小屋 9:35

7日目

三伏峠小屋 3:00ー本谷山 4:20ー塩見岳 7:00ー熊ノ平小屋 11:20ー農鳥小屋 13:45

8日目

農鳥小屋 4:00ー農鳥岳 5:10ー農鳥小屋 6:45ー間ノ岳 7:45ー北岳 9:50ー間ノ岳 12:15ー農鳥小屋 13:10

9日目

農鳥小屋 5:10ー間ノ岳 6:30ー三峰岳 7:10ー両俣小屋 10:10

六日目。この日は行動時間五時間と短くレスト日であった。テンバにつくや否や酒を飲みだす。昼間から青空の元呑んでくれる。先輩にさし入れてもらった酒2Lも飲み干し酒がない縦走なんて・・・と嘆く。今思えばこいつら毎日エッセンの時酒飲んでるし。もう、ぷんぷん

七日目。昨日のレスト日から一転今日は10時間行動。何とかテンバに到着。今日はりんご酒！！と盛り上がる一行。いったいどんだけ酒持ってるの？リーダーの俺はまったく酒が飲めないというのに。

八日目。アタック装備での行動。農鳥で朝日を拝み、間ノ岳北岳へ。天気も良く気持ちいい日になった。

九日目。今日のレスト日。三峰岳でかわいいお姉さんに話しかけられ元気をもらう。両俣小屋は小川が流れ木漏れ日が差し素敵

なテンバだった。終盤戦に向け昼寝を楽しむ。

10 日目

両俣小屋 4:00—仙丈岳 9:30—長衛小屋
13:0

11 日目

長衛小屋 4:00—甲斐駒ヶ岳 7:20—仙水
峠 9:50—早川尾根小屋 13:43

12 日目 曇りのち晴れ

早川尾根小屋 2:10—地藏岳 5:30—観音
岳 6:30—薬師岳 6:50—青木鉱泉 10:00

十日目。終盤戦になり荷物も軽くなり軽快に歩く。この日は千丈が岳までいい感じの登りがあるので一年生に団装をいっぱい持ってもらった。なんだか江川は機嫌が悪そうである。テンバにつき女子高校生を見つけ興奮気味の山口を横目に明日に備える。

十一日目。甲斐駒ヶ岳ってなんか雰囲気いいよね、とそんなことを思う。

十二日目。とうとう下山日。下山したい気持ちが高まり 1 時起床。カモシカのようなスピードで鳳凰三山を駆ける。テンションマックスのまま青木鉱泉へ。いや～長かった。

北ア 前穂北尾根(サマテン)

日程：2016 年 8 月 7 日(日), 8 日(月)

メンバー：山下耕平(会 3) 植野侃太郎

ルート：前穂北尾根

記録

1 日目

0710 小梨平発

0945 横尾

1045 本谷橋

1215 涸沢ヒュッテ(T.S.)

2 日目

0300 起床

0405 涸沢ヒュッテ発

0505 V・VIの科尔

0545 V峰頂上

0625 IV峰頂上

0925 III峰頂上

0955 前穂高岳山頂

1210 岳沢ヒュッテ

1410 小梨平

報告

1 日目は SAC ならよーく知っている道をのんびり歩いて行った。8 月の涸沢はとにかく人が多い！暑さと人の多さで頭がどうにかなりそうになった。

2 日目。V・VIの科尔までは、涸沢からはすぐに着く。1 パーティ、先行パーティはいたものの、幸い北尾根はすいていた。V 峰、IV 峰を超え、III 峰の取り付き付近から III 峰の頂上にかけてザイルを 3 ピッチ出した。ザイルを出すのに時間がかかってしまったことが反省である。III 峰～先は、II 峰の下りでザイルを出した他は、すいすいといき、前穂高岳山頂へと到達。お姉さんに話しかけられ満足した私たちは、重太郎新道でヒイヒイ言いながら、小梨平へ下った。

北ア 滝谷登攀

日程：2016/8/7~9

メンバー：蒲澤・塩谷

8/7 快晴 滝谷遡行

5:40 鍋平

8:20 滝谷避難小屋

9:00 雄滝巻き開始
12:00 雄滝巻き終了
13:00 滑滝登攀開始
14:00 滑滝登攀終了
15:00 B 沢出合
16:00 スノーコル

8/8 快晴 滝谷第四尾根

5:00 起床
6:15 登攀開始
9:00 ツルムの頭
10:35 登攀終了
12:00 北穂小屋テンバ

8/9 晴れ ドーム中央稜

3:30 起床
4:20 出発
5:30 登攀開始
9:30 登攀終了
11:30 涸沢
13:00 横尾
15:00 小梨平

8/7

新穂高の駐車場がいっぱいだったので、鍋平に車を止めて出発。快晴のため暑さに苦しむが、滝谷出合に到着。出合で1本とついていると、塩谷が大量の虫にたかられていた。滝谷を詰めていくと地図で思っていたよりもすぐに、雄滝が出てきた。雄滝に近づいて巻き道を探るが、これだというルートが見えてこない。手前の岩場のフェイスからダブルロープで登り始めた。濡れや岩の脆さもあって苦戦するが、なんとかブッシュ帯までたどり着いた。途中で自分が登った方ではないルートにロープが流れてし

まい、塩谷が苦勞するが突破してくれた。ブッシュ帯からのトラバースは草付が濡れて滑り、高度感もあったので緊張した。トラバース時のロープの流れが悪くなり時間がかかってしまった。雄滝の上は100m程の雪渓があった。軽量化のためアプローチシューズと軽アイゼン装備だったため慎重に登った。次の滑滝は右側を登った。滑滝は緩傾斜のスラブでフリクションも良く効くので特に問題はなかった。滑滝を過ぎると、ガレ場をC沢右俣まで詰めた。いつ落石が来るかわからないような地形だったので慎重に素早く歩いた。B沢出合付近の雪渓から水を採ったが、F沢あたりで汲めば良かったと後悔した。スノーコルのテンバは2張程しか張れない広さで、すぐ目の前に滝谷の壁がそびえており、翌日の登攀への意欲が沸いた。

8/8

この日は荷物をリード用とフォロー用に分けて登った。第四尾根の取付きはテンバから目と鼻の先だった。岩は想像よりも安定していて、残置支点もところどころあったので、快適に登ることが出来た。8pで縦走路に出て、昼にはテントを張って、炎天下の中寝て過ごした。

8/9

早く起きすぎたため、明るくなるのを少し待ってからドームまで歩いた。この日は滝谷側がガスっており、寒さを感じた。3尾根を下り、取付きへの懸垂点を探すが、なかなかいい懸垂点が見つからなかった。ピナクルに捨て縄を掛けて懸垂した。後で調べたところ、自分たちが懸垂した所よりも少し下にしっかりした懸垂点があるらしい。ドーム中央稜も岩は安定していて、

快適に登ることが出来た。トポ上の核心部も悪いのは、ほんの一か所で、支点も取りやすいのであまり苦勞せずに突破できた。安心していただけの、ノーマークの4級のピッチが結構悪く、一度塩谷がリードするも、核心部でザイルの流れが悪くなり一旦降りた。次に自分がザイルの流れが悪くならないルートで、核心手前まで行き、核心のチョックストーンを越えることに成功。なんとか終了点までたどり着けた。なんでも4級のルートは自分が登ったよりも左側から回り込むように登るらしい。アルパインではグレーディングを盲信することなく、自分の目でルートを見極める事が大事だと感じた。その後は小梨平でサマ天と合流し、カレーとシチューをご馳走になった。

北ア 屏風岩東壁雲稜ルート(サマテン)

日程 8/10

行程 小梨平～横尾～東壁 T4 尾根基部～T4～雲稜ルート～屏風の肩～前穂北尾根最低コル～涸沢

メンバー L 荒川武大(会5)、加藤穂高(会4)

行動記録(以下文責 加藤)

8/10(水)

04:10 小梨平

06:10 横尾

08:00 T4 尾根基部(登攀開始)

09:40 T4(雲稜ルート取り付け)

12:00 扇岩テラス

16:10 屏風の頭手前でロープ解除

18:00 屏風の肩

18:50 前穂北尾根最低コル

20:10 涸沢

はじめての屏風はやっぱり雲稜ルート。有

名なのは3ピッチ目のボルトラダーでアブリの掛け替えのところだがその他にもしびれるピッチが多く自分の今の力量ではハードな一日になった。

アプローチは分かりやすい。横尾の橋を渡り20分ほど行くと道標があり柱に「岩小屋跡」と書かれている。ここで渡渉。靴は脱がなければならないが距離は短い。渡渉先がすぐに1ルンゼの押出なのでこれを詰めた。しばらく歩くと東壁が目の前にバーンと見える。T4尾根それと扇岩テラスははっきりして下からでも確認できる。T4尾根基部には残置Fixがあり取り付けもわかりやすい。荷物を軽いのと重たいのにしてリード、フォローで交換しながら登った。T4尾根下部は1ルンゼ崩壊の影響かルート上チリが積もっていて不意に足を滑らせないように注意。取り付けから2Pスタカットの後コンテで歩ける斜度になりT4に到着。思ったよりキジ臭かったりせず広く快適そうなビバーク地。ここから先が雲稜ルート。1P目はコナークラックを登る。リード荒川さんのムーブ、一瞬頭より足が高い位置にあったような、、全体通して単純な岩登りの難しさとしてはここが核心に思えた。2P目は出だしのフェースを左上。A0する気満々で離陸するも1ピン目遠くヌンチャク掛けるだけで一苦勞。右にトラバース後、左上して扇岩テラスへ。ルートが屈曲していてロープの流れに気をつかう。3P目きましたエイドパートで荒川さんリード。ピンは多いがリングの変わりに靴紐みたいなへなちょコスリングだったり選びながらアブリを掛ける。ハングに突き当たり終了。4P目エイドで直上後、右へトラバース。このトラバース高度感が凄まじい。5P目傾斜が

落ちてきて草付きも減り一枚岩の快適なスラブをシューズのフリクションでぐいぐい登る。残置スリングのあるわかりやすい終了点で切る。その後、岩とも言えぬ濡れたルンゼと木登りで2ピッチスタカットで屏風の頭手前でロープ解除。その後30分登って屏風の頭？藪々でどこが頭かはっきりしない。下降開始で前穂側に歩き始めるが生い茂る藪。屏風の肩を過ぎると踏み跡がハッキリとした。パノラマ新道から肩まで来る人が多いようだ。確かに肩はは槍穂高に囲まれ絶景だった。もう暗くなってしまった20時過ぎ涸沢に逃げ込み行動を終えた。屏風の肩でビバークをと思っていたが1人2リットルの水ではまったく足りなかった。次の日パノラマ新道経由で横尾、小梨平に戻った。

とにかく熱い！さすが東面、フライパン状態だった。もう少し涼しい時期がいいのかな。

北ア 前穂東壁・北壁~Aフェース(サマテン)

日程：2016年8月12日

メンバー：L 花谷泰広(OB) 師田信人(OB)
塩谷晃司(会4)

行程：小梨平~奥又白~C沢~東壁~前穂高岳~岳沢~小梨平

行動記録：

8月12日(1日目)

3:50 小梨平~5:10 パノラマ新道入口
~7:00 奥又白池分岐~8:00 C沢入口~9:30
登攀開始~12:00 トップアウト~12:20-50
前穂高岳~14:00 岳沢小屋~15:20 小梨平

松尾 OB の追悼の山行に、同行させていただいた。松高尾根より奥又に上がり、池

を經由せずにC沢の入口へ。残雪が少ないといえども、雪溪のトラバースはあった。C沢チョックストーンを越えずに右に行けば四峰正面壁の取付だが、さらにC沢を詰めていく。数か所、Ⅲ級程度の登りがあるがノーロープで行動。ここはあまり問題がないのだが、乗越したあとに浮石が堆積しているところが多いので、十分に間隔を空ける、場合によっては空けないなどの対策が必要である。途中で三峰リッジ末端を回り込んでB沢に入り、Dフェース基部より左に折れ日陰になっているところが北壁で、取付には残置ハーケンがある。1pで、第一テラスまで。松高カミンはチムニーまではいかない凹角。このあたりの岩は思ったより硬かった。2p目はかなり脆く、大きな落石も起こった。一番ひやひやしたピッチである。ここまでは花谷さんのリードで、ここからは塩谷がリード。Aフェースに入ると岩も硬く、クラックも発達していてすこぶる快適だった。4p目は左に回り込んだが、小さく左上するのが正規のルートだったようだ。山頂直下でロープを外し、簡単な岩場を登って前穂頂上へ。山頂に抜ける爽快感を味わった。

奥又周辺はかつてSACのテリトリーだったので、後輩に引き継いでいきたい。そして、花谷さんや師田さんと登れたことが良い刺激になった。自分も一生を通じて登山を楽しみたいと強く思う。

北ア 明神主稜(サマテン)

日程：2016/8/12~13

メンバー：会3) L大槻 山下

8/12

6:00 起床 7:15 発 8:20 岳沢旧7番標識

8/13

本来 1day のルートを 2 日で行ったためかなり余裕があった。テンバはⅢ～Ⅳ峰間でもよいがⅢ峰を超えてすぐのところが一番快適そうであった。Ⅲ峰の下りはクライムダウン、Ⅱ峰は 20m と 15m の 2P、奥明神沢ノコルへは 1 番上ではなく歩きで少し下ったところから懸垂し 20m1P だった。前穂への登りはどこからでも行けるが、偵察と称して個々に別の踏み跡を行くとお互いの姿が見えず声も聞こえづらくなることがある。基本的には中央から右寄りに行けば最短であると思う。2 日で行くなら奥穂南稜などとつなげたほうが充実するだろう。

◎9 月

谷川連峰 万太郎谷本谷

日程：2016/9/3~4

メンバー：会 3) L 大槻 山下 会 2) 山口

9/3

3:30 松本発 6:50 駐車場 7:20 入渓 8:50 関越トンネル換気口 9:25 オキドキョウノトロ場 11:30 一ノ滝 12:00 一ノ滝落ち口 12:20 二ノ滝 13:00 テン場

9/4

4:30 起床 5:40 発 6:10 三ノ滝 6:25 取り付き 7:40 三ノ滝上段落ち口 10:00 稜線 10:10 谷川岳肩ノ小屋(⇔オキノ耳・トマノ耳) 10:50 肩ノ小屋発 12:10 天神平

9/3

駐車場から 5 分ほど歩いたところの透過型堰堤から入渓。水量は 9 月なのでおそらく少ない方だが、一ノ滝までにオキドキョ

ウノトロ場と、もう 1 か所滝壺で足が着かず泳ぎが必要であった。オキドキョウノトロ場は泳ぎ切れば浅くなるが、滝壺の方は水量次第で上がるのが辛いかもしれない。一ノ滝の巻きは、ネット上で左岸を 100m ほど戻ったところから、という記述を目にするが全くの間違いで、左岸から滝壺を囲むように張り出している尾根の末端の岩のバンドを右上する。岩のバンドを抜け樹林に入ると踏み跡が出てくる。ルンゼがあるが登らずにトラバースする。ルンゼはつい登りたくなるが、続く踏み跡をよく探すべし。今回は一ノ滝の高巻きがスムーズにいったため、早くテン場に着くことができた。二ノ滝と三ノ滝の間しか幕営適地はないが、適地は少ない。三ノ滝手前、二俣を右に進み少し行ったところの右岸にある草地をテン場にした。草ボーボーだったため踏み倒してテントを張れる空間を作った。後続パーティは少し進んだところの水流際でタープを張っていたが、夜中に増水したらひとたまりもなさそうであった。

9/4

テン場から三ノ滝までは 15 分程度で着いた(テン場から三ノ滝下段上部が見えている)。下段は水流右の凹角から。やや立っていて濡れていたが、よく探せば正面にガバがある。浮いていそうな雰囲気でも力を入れて握るのは少し怖かった。直上するルートもあるが、左上して落ち口に出る方が簡単で次のピッチにも繋ぎやすい。上段は本流の冷たい水を避け、右からくる支流の細い水流を登り、本流の落ち口と同じくらいの高さから落ち口に向かって 50m ほど樹林をトラバース。トラバースの入り口は不明瞭だが、行きやすそうなところを行けば

薄い踏み跡があり、これをたどれば落ち口の15mほど上流に出る。そこから少し進めば一気に水量は減る。最後の詰めは踏み跡はあるようでなく(出てきたり消えたり)、右寄りに登り肩ノ小屋と万太郎山の間稜線に出ることを意識して行った。多少藪こぎしたが、選べば腰程度の高さのハイマツやササをかきわけて進む程度で済むと思われる。稜線に出たから肩ノ小屋までは10分程度。山下の足首の不調と天候が微妙だったこともあり天神平方面から下山した。ロープウェイの駅から土合駅までは地味に遠いので早めに移動すべし。

北ア 錫杖岳前衛フェース

メンバー：蒲澤・塩谷・穂高・小山・村上

9/3

6:15 駐車場

8:00 岩小屋

蒲澤・村上隊

9:00 1ルンゼ登攀開始

12:30 登攀終了

13:40 1ルンゼ取付き

14:15 3ルンゼ登攀開始

16:00 3p目終了点下降開始

16:40 3ルンゼ取付き

17:30 岩小屋

塩谷・穂高・小山隊

9:40 左方カンテ登攀開始

15:00 大チムニー終了点下降開始

17:00 下降終了

17:50 岩小屋

9/4

蒲澤・村上隊

6:00 左方カンテ登攀開始

10:30 登攀終了

11:40 下降終了

12:00 岩小屋

塩谷・穂高・小山隊

6:20 1ルンゼ登攀開始

12:30 6p目終了点下降開始

14:30 下降終了

15:00 岩小屋

16:30 駐車場

9/3

土曜日という事もあって、先行パーティがいたが、翌日の天気予報が悪いので岩小屋は空いていた。急いで準備して、2隊に分かれて取付いた。

自分と村上は1ルンゼに取付いたが、他パーティは左方カンテに向かったようで1ルンゼには自分達だけだった。取付きを見逃さないように、壁に沿って歩いたのが災いし

トポ上の2p目終了点を開始点と勘違いしてしまった。素直に踏み跡を辿って下れば正解だったようだ。しかし、登攀開始時にはそうとは知らずトポの説明と違和感を感じながら

登った。結局2p目を終わったところで間違いに気付いたが、その時にはトポ上のルートよりV字岩壁に近付き過ぎてしまい修正するのは難しそうだった。そのまま直上しようとしたが、

スタンス・ホールドともに悪く、2m程登ったところでロアーダウン気味にトラバース

してハンドサイズのクラックから登った。
その後は正規のルートに合流し、合計 5p で
登攀終了。

4p で 1 ルンゼ正規取付きまで戻り、3 ルン
ゼ取付きへ向かった。3 ルンゼはルンゼ上
に浮石が多かった。3p 登ったところで下降
開始した。懸垂下降中ロープを引き抜く際
に、

落石があったので、ロープ回収時は要注意。

9/4

次の日も村上と左方カンテに取付いた。核
心の 2p 目はガバを掴んで思い切って越え
た。大チムニーはうまく側壁を使って越え
ることが出来たが、開始点から数メートル
は支点を

取ることができないので少し緊張した。合
計 7p で草原に抜けた。下降は大チムニー終
了点から、北沢の方に懸垂した。懸垂 4p で
北沢に降りることが出来た。

初めて夏の錫杖岳を登ったが、一番感じた
のは残置支点の少なさだった。残置は終了
点・懸垂点を除いてほぼ皆無であり、その
ためランナウトも普段に比べて長くなった。
また、ルートファインディングに関しても、
残置の少なさゆえに苦勞した。普段自分が
どれだけ残置に助けられていたかを痛感し
た。ただその分、自由に登ることもできて
楽しむことが出来た。

支点構築・ルートファインディング・登攀
力を磨いて来年も通いたいところだ。

北ア 湯俣川・黒部源流

日程：2016/9/11~12

メンバー：蒲澤

9/11 晴れ
5:30 七倉山荘
8:30 晴嵐荘
9:00 入溪
9:55 ワリモ沢出合
10:27 赤沢出合
11:42 硫黄沢出合
15:40 樺沢出合
16:00 弥助沢出合
16:15 テン場

9/12 晴れのち雨
5:00 起床
6:45 出発
9:00 三俣山荘
9:43 黒部源流石碑
11:00 祖父沢出合
11:15 祖父平

9/13 雨
7:00 起床
8:45 出発
10:30 雲ノ平キャンプ場

9/14 霧のち晴れ
3:30 起床
5:15 出発
6:23 祖父岳
7:15 水晶小屋
8:40 真砂岳分岐
10:20 湯俣岳
11:50 晴嵐荘
15:00 七倉山荘

記録

1 日目は快晴だった。ここ数日間は晴天が

続いたので湯俣川の水量も少なく、渡渉も全く問題はなかった。若干水が冷たかったので、ウェットスーツを履いてきたのは正解だった。

入溪から硫黄沢手前までは、硫黄の黄色い岩が続きところどころに温泉も湧き出ていて普段の沢とは違った雰囲気楽しかった。硫黄沢周辺では特に硫黄の量が多く、川底が真っ白になっていた。

硫黄の白と沢の青が混じりあって、ターコイズブルーになった沢は初めて見る沢様だった。硫黄沢を過ぎると赤茶色のヌメった沢に変化した。ラバーソールの靴のため、何度もコケながら遡行した。この辺りまで遡行すると、魚影が数え切れないほど見ることが出来た。遡行しながら、釣りをして一匹だけ獲ることが出来た。

この日は弥助沢に入ってすぐのところピバークしたが、もう少し下流の方が水も取りやすく、場所も広がった。ツェルト泊ではあったが、この時期でも寒さを感じることはなく

うまく張ればテントと同じぐらい快適だった。ただペグがあればなお快適なツェルトを張ることが出来たと思う。

2日目は弥助沢を詰めて三俣山荘近くのコルに出た。弥助沢は水量が少なく沢筋が複雑で、ところどころ伏流になっているのでルーファイには注意が必要だ。

曇りなどで視界が悪いときは鷲羽岳などに向かわないよう頻りにコンパスを合わせた方がよい。

夕方から雨が降る予報だったので迷ったが、祖父沢なら多少増水しても遡行が可能だろうと判断して、計画通りに黒部源流を下って祖父平まで行くことにした。

祖父平は運動場ぐらいの真っ平な芝生になっていて、これ以上ないくらい快適なテンバだった。予報通り夕方から雨が降ってきたが、勢いは弱く、本降りになったのは深夜になってからだった。

3日目は5時頃に起きたが、雨が強かったので赤木沢遡行は諦めて、一旦二度寝した。7時頃には雨が弱まったので朝食を摂ってから、祖父沢の様子を見たところ、増水はしているが遡行できない程ではないと判断して出発した。

祖父沢は増水のため支流が沢山発生していたが、遡行には問題はなかった。翌日は雨の予報だったが、7時頃から霧が晴れ、硫黄尾根を見つつ竹村新道を下ることが出来た。

竹村新道は話に聞いていた通り急で、冬季の通過には苦労しそうだ。

反省

湯俣川は記録にも書いた通り、沢の景色が様々に変化していくのが楽しい。沢登りとしては二流の沢かもしれないが、入溪者も少なく魚が豊富なのでオススメできる沢だ。2年生や1年生のパーティーで行くにはちょうどいい沢で、魚釣りや焚き火などの沢の醍醐味が味わえると思う。ツェルト泊の経験はあまりなかったのだが、想像以上に快適だった。

特に2日目の深夜はかなり激しく雨が降ったが、目立った浸水もなく、テント泊と同程度の耐水性に感じた。

雨天時の遡行継続の判断に関しては、祖父沢はゴルジュがあるわけでもないのだからこれで問題なかったと思う。ただし、より水量の多い黒部川本流や赤木沢などでは、より慎重な判断が必要に思う。

北ア 前穂北尾根

日程：2016年9月26日(月), 27日(火)
メンバー：山下耕平(会3) 前田達樹(会2)
山口耕平(会2)
ルート：前穂北尾根

記録

1日目
0830 上高地バスターミナル発
0940 徳澤
1040 中畠新道分岐
1230 奥又白池
2日目
0400 起床
0500 奥又白池発
0635 VVIの科尔
0710 V峰頂上
0755 IV峰頂上
0820 III峰取り付き
0955 III峰頂上
1030 前穂高岳山頂
1300 岳沢
1420 上高地バスターミナル

報告

2年生を連れての穂高バリエーション山行で、当初は前穂北尾根と奥穂南稜を予定していたが、天気が悪く、入山を1日遅らせ、3日目に予定していた奥穂南稜をカットした。

1日目は雨の中奥又白池まで。山下と山口は沢登りに慣れきっており、どうせテントの中で空だきをするからと、あえてカッパは着なかった。時間的にはVVIの科尔まで行けたものの、雨の中行くのは気が引けた

ため1日目は奥又白池までとした。

2日目、奥又白池からのトラバース道を使い、VVIの科尔まで。奥又側からであれば道は明瞭で印もあるため分かりやすい。北尾根区間は2年生にルーフアイを頑張ってもらった。ザイルはIII峰の登りで2ピッチ、山頂直下で懸垂1ピッチ出した。2年生のルーフアイ・ザイルワークはまだこれから成長していくのかなという感じであった。晴れて山頂へと到着し、悪評高い重太郎新道を下り、上高地バスターミナルへと帰着した。

南ア 赤石沢(敗退)

日程：2016年9月14日
メンバー：L塩谷晃司(会4) 山下耕平(会3)
小山悠太(会2)
行程：沼平~樫島~赤石沢(敗退、ピストン)
行動記録：
9月14日
3:40 沼平ゲート~5:00 中ノ宿吊り橋~6:10
赤石ダム~7:00 入溪~9:45 敗退決定~11:00
入溪点発~14:30 沼平ゲート

また、来てしまった。しかもまた同じようなメンバーで。半年ぶりの沼平ゲートは、当然だが何も変わらず、懐かしかった。絶望の天気予報は直前で少しよくなり、それでも大きくない希望を抱いて、林道を進む。「沢の音、スゴくないすか」という会話は聞こえないふり、白波立つ沢の流れは見つめふりして、入溪点に到着した。

うすうすどころか、完全に知っていたが、沢は増水していた。一度は中止を決定して竿を出したが、少し様子を見てみることにした。ゴルジュの入口に立ち、絶望的な状

況を見れば、ある意味あきらめがつくだろうと。吊り橋の水量計付近の徒渉で、太もも上まであれば遡行は困難という目安があるが、今回は腰だった。最初の高巻きの直後に激流に阻まれ、ロープを出してジャンプ徒渉でクリア。後輩二人は、こういう徒渉は初めてだったようで、衝撃を受けていた。その後、通常は水線越しで行ける淵も、議論の余地なく高巻きを選択させられ、沢床に復帰するのには懸垂下降が必要だった。だが、ここで懸垂して、ロープを抜いてしまえば、敗退は困難になる。先に続く悪相の溪を見て逡巡したが、これ以上進む判断はできなかった。

経験の少ないメンバーを連れてこの先に行くことは考えにくい。だが、自分がどこまでやれるのかということも、正直気になった。車アプローチ 300km、林道アプローチ 18km の末、赤石沢の進んだ距離、500m。なんとも言えない気持ちだが、必ずリベンジしよう。沢の技術を後輩に伝えることも、重大な責務だと思う。

《事故報告書》

穂高岳事故報告

- 山行計画の概要 期間：2016年9月24日～9月26日(実働2日+予備1日)
場所：北アルプス穂高岳
メンバー：菊田水樹(会4)、江川夏(会1)、高井野乃子(会1) 現役留守：加藤穂高(会4)

行動予定 【1日目】 上高地～岳沢 【2日目】 岳沢～天狗の科尔～ジャンダルム～奥穂高岳～前穂高岳～岳沢～上高地

●行動記録

9月24日

12:00 上高地出発

12:45 風穴付近

14:00 岳沢小屋

9月25日(事故当日)

3:40 岳沢出発

5:00 天狗沢 2570m 付近のやや傾斜が落ちている場所で一本開始

5:03 高井に落石が直撃

5:07 事故通知書記入開始、高井の呼吸困難の症状は収まる

5:20 高井に鎮痛剤飲ませる。歩行可能なくらいに症状は回復

5:30 手当後、自力下山が可能だったので下山開始

6:30 岳沢小屋到着。荷物撤収中、高井は小屋の中で待機

6:50 荷物の撤収完了、事故の第一報を現役留守の加藤に連絡

7:15 荷物撤収や現役留守への連絡を終え、岳沢小屋から下山開始

8:50 上高地到着

11:20 松本駅到着後、タクシーで丸ノ内病院へ行く

●事故当時の現場の様子 秋雨前線で天候不順の日が続いていたが、事故当日は晴れていた。しかし、天狗沢の上部の岩は前の晩の小雨で濡れており滑りやすかった。また、事前に情報を得ていた通り天狗沢は全体的に浮いた岩が多かった。事故が発生した午前5時はまだ薄暗く、ヘッドランプを着けて行動していた。事故現場付近は背の高さが30～80cmほどの草や灌木が茂っており、休憩などのためにしゃがむと上への見通しが悪い状況にあった。

●事故の概要 3:00に起床し、朝食を食べて3:40頃に岳沢を出発した。初めは江川に先頭を歩かせ、その後高井、菊田と続く隊列で天狗沢を登っていたが、300mほど登ると不安定な岩場になったので菊田が先頭を交代した。このあたりのルーファイで少し手間取り、登山道ではない場所を50mほど登って降りてくるなどして余計な体力を消耗してしまった。正規ルートに復帰した後、標高2450m付近で沢の本筋からトラバースして支稜をまたぎ、つづら折りの登山道をさらに100mほど登る。つづら道は草付きの斜面で、滑りやすい岩が多く一年生はさらに体力を消耗した様子に見えた。つづら折りの最終地点付近、登山道が右上に向かい始める手前で、傾斜が緩んで休憩が取れそうな場所が現れたので一本にする。休憩を開始したのは5:00ちょうどで、高井は山側に対して右手を向き、菊田は斜面からやや背をむけ、江川は斜面と向かい合う形で休憩をしていた。休み始

めてから 3 分後、菊田が登山道の上の方から何か落ちてくる音に気付く。顔をあげて上を見た瞬間、草むらの中から唐突に落石が飛び出してきた。落石は群発で発生したものではなく、単体で発生したらしくその時落ちてきたのは一つだけだった。菊田が声を上げようとした瞬間、高井の左肩甲骨あたりに石が直撃した。当たった石の大きさは直径 20 cmほどで、重さは約 3 kg だった。

●事故後の高井の容態 落石が背中に直撃した直後は衝撃のため呼吸困難になり、会話ができない状況だった。数分後、呼吸できるようになったが背中全体の痛みと呼吸した時の肺の痛みを訴える。下山後、休日の救急を扱っていた丸ノ内病院で診察したところ、打撲・擦傷と診察された。しかし、2 日経っても痛みが引かなかったため再度病院へ行ってレントゲン撮影をすると、肺の内出血が確認され全治 2 週間程度であると分かった。安静にして経過を見たところ 2 週間ほどで肺の痛みは完治した。

●事故後の行動 5:03 頃に高井に落石が直撃し、上記の通り最初は呼吸困難で話ができる状態ではなかった。江川に医療缶からシップを取り出させ、高井の患部に貼った。5:07 から江川が事故通知書の記入を開始した。この時点での高井の症状は、背中の痛み・背中の若干のしびれ・呼吸をした時の肺の痛みであった。5:10 には呼吸が回復し、会話はできるようにはなったが、背中や肺などの各部の痛みは依然として続いていた。このとき高井に防寒着を着せ、水分補給をさせた。さらに 10 分が経過した

5:20、高井に鎮痛剤としてロキソニンを 1 錠飲ませる。この頃には症状も落ち着きを見せてきて、普通に会話ができるようになった。斜面を少し上り下りさせたところ、歩行に困難はない様子だったが、依然として背中の痛みと呼吸の苦しさを訴えていたのでこれ以上の登山の続行は無理と判断し、5:30 から下山を始めた。この時、背中から転んで患部に岩に当たって症状が悪化するのを防ぐために、高井にはアタック装備（レインウェア、防寒着、行動食等であり、重量は 5 kg 程度）を背負わせたまま下山させた。最初の 30 分間は痛みが強かったが、下るにつれその痛みも大分和らいでいったようだった。6:30 に岳沢小屋に到着し、高井は小屋の中で休ませ、菊田と江川で BC の荷物片付けに向かう。6:50、片付けが終わった後現役留守である加藤に落石事故の連絡を入れる。7:15 に岳沢小屋から下山を開始する。高井の装備と団体装備は菊田と江川で手分けして持ち、高井は若干の装備を持って登山道を下った。アタック装備での歩行は特に問題はなさそうであり、健常者が歩くペースと変わらない速さで登山道を降り切り、8:50 に上高地に下山する。そこからはバスと電車を乗り継ぎ 11:20 に松本駅に到着し、高井と菊田はタクシーで丸ノ内病院にむかい、診察をしてもらった。

●事故の反省点と今後の改善点 ①ガレ沢での休憩における注意不足 今回高井は斜面山側に対して横を向いて休憩しており、本来なら落石などの危険は察知できる態勢だった。それにも関わらず落石を回避できなかったのは、一年生が記録をとることに

集中して上向き休憩が形だけになってしまい、実際は落石への注意を十分に払っていなかったからではないだろうか。山では常に気を引き締めていることが必要であり、今回の休憩地点の立地の悪さを考えると、普段以上に危険に対して敏感でいることが必要だった。今後は、ガレ沢で休む時は形だけの上向き休憩をするのではなく、記録や読図などの作業をしている際にも上からの音などに注意を向けることが必要である。

②上級生の不適切な行動 事故を未然に防ぐためには適切な上級生の行動が不可欠だが、今回私がそのような上級生らしい行動をとっていたとは言い難い。まず、休憩中に一年生にきちんと沢の上の方に注意を向けるように指示をしていなかった。また、自分自身が沢にやや背を向け座っていたというところも反省点である。上級生がそのような体勢でいたら、この場所では上を確認しなくてもいいんだという意識を下級生に植え付けてしまうだろう。より経験が豊富な者とし 7 て、これからは危険地帯で一年生にしっかりと危機意識を持たせられるよう、声かけなどの手本となる行動をとっていききたい。

③不適切な休憩地点 今回、土砂が盛り上がったところのくぼみを休憩地点として選んだが、ここからは土砂や草に視界を阻まれて上部の様子が見えづらかった。天狗沢は落石が多いこと、また数日前までの雨で岩場が不安定な状態になっていることは事前にわかっていたので、落石に備えるためにももう少し慎重に休憩地点を決めるべきだった。これからは、ガレ沢などで休憩をする際には少なくとも 30m 以上は見通しがきくような地点を一本の場所として選ぶようにする。

④悪場

の歩行技術不足 ③の休憩地点の選択にも関係する問題なのだが、見晴らしのよい場所を休憩地点とすることができなかったのはメンバーの歩行技術的な要因もあったと考えられる。悪場はすぐ抜けるというのが山岳地帯で行動するときの原則だが、今回はより安全だろうと思える場所まで登ることができず、条件の悪い場所を休憩地点に選んでしまった。メンバーにもう少し余裕があれば、安全なところまで登ってしまおうという判断もできたはずである。歩行技術は一朝一夕でつくものではないので、今後とも積極的に険しい山に登り、悪場をスムーズに越えられるだけの体力と技術を培っていききたい。

⑤草付きにおける落石の怖さの認識不足 今回、落石に気が付いたのは菊田が 3 秒前、一年生たちが直前だった。このように落石に気付くのが遅れた原因としては、草に音が消されて聞こえてこなかったことも挙げられる。ガレ沢で何度か落石に遭遇したことがあるが、そこでの落石は 100m 以上離れていても音が聞こえる場合が多かった。しかし草つきではすぐ近くまで岩が落ちてこないと言が聞こえず、落石に対して備えが足りなかった我々は今回の事故を防ぐことができなかった。草つきではいつどこから落石があるか分からないので、これからはこのような場所で行動する時は落石に細心の注意を払うようにする。

●その他の反省点 下山後の診察では打撲・擦傷としか診断されなかったが後日レントゲンを撮って肺に内出血があることがわかった。しかし、この時高井は菊田に診察結果を伝えたのみで、メンバーリストで

山岳会全体に情報を流すなどの措置をしていなかった。事故の症状がより重いものであったことが判明した以上、このような重要な情報は山岳会全体で共有すべきだった。

●リーダーの言葉 会 4 菊田水樹

今回の天狗沢における事故は、危険に対する注意不足という初歩的なミスから起こったものだった。重大な事故に至らなかったのはたまたま当たり所が良かったからであり、一歩間違えば取り返しのつかない事故になっていた可能性もある。落石に対する注意は、新人合宿から徹底して教え込まれる山の基本事項である。しかも、上級生は自分が危険を認識していればよいというわけではなく、登山経験の浅い下級生にしっかりと注意を向けるよう指導していかなければならない。今回の事故はこのような山の基本を徹底していなかった自分の未熟さから発生したものであり、この事故を教訓として今後を活かしていきたい。具体的には、危険地帯で行動するときにはいつ落石があっても対応できるよう自ら万全に備えることは当然として、下級生にも登山の際そのような意識を持ってもらうよう指導していきたい。

●江川からみた事故の様子とその反省

自分は事故が起きる直前のピッチで先頭を歩かせてもらっていたが、歩行速度を速くしすぎたり、間違った道を進んで戻ったりと、隊の消耗に繋がるミスをいくつか犯してしまった。まず、そこが一つ大きな反省点である。これがなければもう少し安全な場所で休憩することもできた。休憩を取

る際、自分の位置から高井が斜面に背を向けて座っているように見えたため注意しようかとも思ったが、結局注意できず、高井を危険に晒すことになってしまった。事故直前まで、自分の中では落石を意識して上方を警戒していたつもりだったが、少し手帳やレーションを取り出そうとした時に水樹さんの声が聞こえ、次の瞬間顔を上げたときには事故が起こっていた。直前まで警戒していたのに落石に気づけなかったのは、辺りが薄暗かったことや、音が聞こえにくかったことも勿論だが、上方への警戒が形だけのものになってしまっていたことが大きな原因だろう。結局落石に警戒していた「つもり」でも、落石を察知できなければ意味がない。「いつどこから石が落ちてくるかわからない」という意識が欠如していたように思う。このように、今回の事故について反省すべき点が自分には沢山ある。こういった一つ一つミスや油断が重大な事故に繋がることを認識し、二度と事故を起こさないよう再発防止に努めたい。

●事故者の言葉 会 1 高井野乃子

今回、落石の直撃という一歩間違えれば大怪我や死につながるような事故にあいました。9 リーダーの菊田さんや江川をはじめとした山岳会の皆様には心配をお掛けしてしまい本当に申し訳ありません。新人合宿からずっといわれ続けていた上方への注意が形だけのものになってしまっていたことや、上方が草付きであったことによる「落石はないだろう」とい根拠のない楽観的な判断が落石の直撃という事故を招いてしまいました。幸いにも取り返しのつかないような事態にはなりませんでした。落石が直

撃したという事実を反省し、今後の山行に
活かしていきたいと思います。